

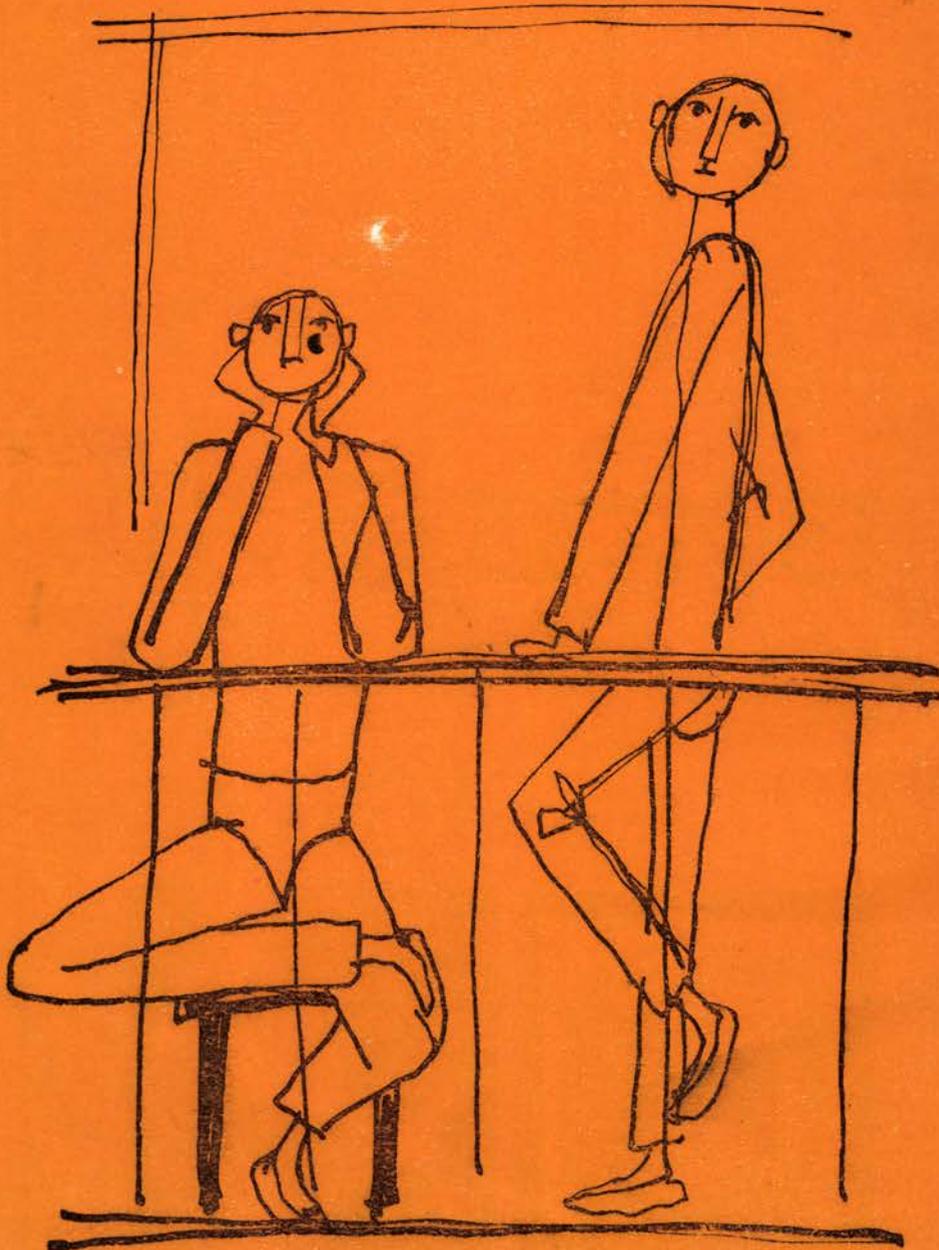
川柳の雑記

No. 430

Pensoj flugas trans la land - limon

THE SENRYU ZASSHI

三月号



麻生路郎☆主宰

川柳雑誌社主催

本社三月句会

4月本社句会

客靴合一
足べラ格芸

春の息吹きが感じられます。
今宵は柔しい川柳ムードに浸りましょう。

日時 三月七日(木) 午後六時
会場 自安寺(「211」一四七八番)

大阪市南区千日前電停東スグ北側

兼題 「話 術」(二首) 麻生路郎選

(路郎選に限り七時半(切り))

「補 欠」(三首) 黒川紫香選

「つぶし値」(三首) 吉田圭井堂選

「おとし穴」(三首) 本多柳志選

三題(当日発表)

清水白柳

席題 句評
呈賞 各題天位・各題天位から路郎選により不朽洞賞
会費 百円

幹事 紫香・いさむ・南宗・文秋・庸佑・八郎・

与呂志・清人・水洞・すゝむ・薫風子・柳

宏子・舟遊・一三天

★投句だけの方は郵券三十円

同封(切三月五日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

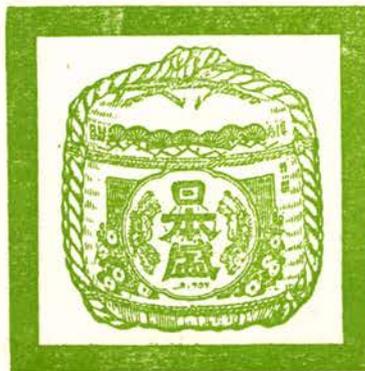
川柳雑誌社句会部

電・大阪(671)六〇八一

日本盛酒坊

和やかにまず一杯!

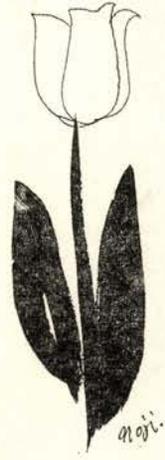
東京酒坊・八重洲口名店街
大阪酒坊・御堂筋道頓堀橋南詰



灘の清酒
ニホンサカリ

不朽洞句帖

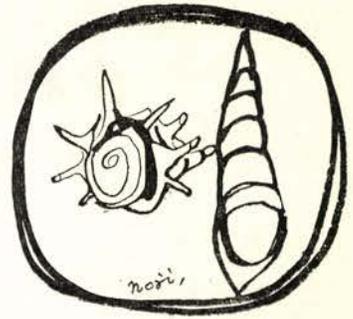
麻 生 路 郎



阿呆になろうと ベレー冠きたグラランドバ
 何も彼も捨ててから 太陽とともに
 女は好きですと 正直に言える齡とし
 選挙などバカらし 貝にとじこもる
 軽蔑をしたりされたり 老いにけり
 城下町今も弓ひく人が住み
 竹馬に乗った懐い出城下町
 あいの子を悲劇と見るも城下町
 城下町酒うる家をつかしま
 城下町ここから博士二三入

川柳雑誌三月号目次

★柳櫛室	一路集	入門講座	★柳界展望	各地柳壇	金泥集	近作柳櫛	同舟近詠	川柳塔	松下山禪尼	★大万川柳10傑決定	耳で読ませる	★現代柳人録	リレー句評	川雑婦人友の会のつどい	窓口談義	句評について	浪人ぐらし	病氣と川柳	外来語と日本人	名句と難句	石見路をゆく	踏み切る	今井鴨平を語る	不朽洞句帖	題字	
.....	「外 交」
(46)	(37)	(30)	(41)	(42)	(29)	(20)	(11)	(6)	(25)	(35)	(32)	(28)	(16)	(28)	(18)	(20)	(14)	(15)	(38)	(4)	(18)	(26)	(12)	(3)	野尻弘	



川柳 名句と難句

麻生路郎

理するだけである。それは一つの事務に過ぎないからだ。
この場合「ガムを噛みながら」の中七が、実によく利いている。それが届けに来た人にとって、どんなにか冷やかに感じたことであろう。
〔四五八〕
路地の奥へ嫁くとテレビ知らんだ
だ

(宏方)

〔四五三〕
母の採点をボーイフレンドにさせる

(いわを)

守かと旅人の心を空虚にしたことはいうまでもなからう。

頭より腕より喉がよく儲け

(遠二)

「どうかうちのママ」
「いかすよ」
「何点ぐらい」

「まあ、八・三ぐらいかな」

「細かくききんだのネ」
アプレのボーイフレンドとの会話である。ママがこんな会話を聞いたら、パパよりも、我が子の方へ、より多く気を使うことであろう。面白いネライの句だ。

〔四五四〕

七堂伽藍み仏は不在なり

(晃)

お寺を訪ねた。本尊仏は東京の博物館に出張されていられると聞いて意外に感じたのである。一本尊は奥まったところに、年中デーと構えていらっしやるそばかり思っていたのに、寺を留守にされることもあると聞いて、だまされたような気がしたのである。「不在なり」の下五が何んだお留

伽藍とは寺の建造物のことで、インドでは古くから、僧の修道をする場所の意味で、園林をさしていたそうである。のちに七つの建物を付属させなければならなくなり、これを総称して、七堂伽藍というのである。それ等の七つとは金堂(本尊仏を安置)、講堂(経法を講ずる)、塔(釈迦の遺骨、仏舍利を納める)、鐘樓、経蔵、僧坊、食堂(じきどう)であるが、時代によって、宗派によって、七堂の名称は一定していないそうだ。

〔四五五〕

はしの歩をついとくだけの慎重さ

(路生)

はしの歩をつくというのは将棋の手法であるが、この句は、将棋そのものを詠んだのではなく、その人の処生上の態度を将棋の手法によって表現したものである。例えば恣一つするにしても容易に深入りしないことを言ったものだ。

〔四五六〕

死亡届けガム噛みながら受理される

(一三夫)

役所の窓口の写生句だが、死生の両岸に立った人の心の動きが、どんなに違うものかということが、読みとれるではないか。

「死亡届けはこちらですか」
「……」

何んのいらえもない。若い女性はガムを噛みながら手を差し伸べて、死亡届けを受

娘っ子一人が、かたずくというのに、ヤレ電気洗濯機ヤレ電気冷蔵庫ヤレテレビやと大騒ぎをしたが、嫁いだ先は何んのことではない、路地の奥だったと、テレビに言わしたところが面白い。
住宅難時代の裏づけもあって、世相もうかがえる。擬人法もこのように詠めば活きてくる。

〔四五九〕

ドラマならここで助かる苦にもまだ
え

(俊和)

悲劇は、そうアツカリとおしまいはならないものだ。失恋のもたえか、貧苦のもたえか、それは判らない。この句ではそこまで判らなくてもいいのだ。とにかくドラマなら、ここで救われる筈だが、ドラマでないだけに、そのもたえはどこまでも続いているという沈痛な表現によって、この句を活かしている。

〔四六〇〕

オールドミスせて原色着て暮し

(圭水)

この句は老嬢自身の句ではなく、第三者の観たオールドミスの句だ。老嬢は淋しいであろう。少しでも若さを保持したいために衣類も原色だと見たのである。そうでないオールドミスもないことはなからうが、この句のオールドミスは或る夜ひそかに吐息を洩らし、僅かに原色の服装によって慰められる多くの老嬢であることを思うと、軽い穿ち味が感じられる。

〔四六一〕

子を五人育てきたないもの知らず

(清生)

「ウワー。お母ちゃん、デコちゃん
が……」

「どうしてるの」

「ウソコしてるよ」

「あらそう」

と、母は慌てて、デコちゃんのお尻のしまつにかかると。こんなことが毎日のように続く母である。食事のさいちゅうでも容赦なく。

五人の子らを育てることは容易でない。それをグチ一つ言わず、汚れ物を手づかみにする母の姿は尊い。この句の「きたないもの知らず」は母性愛のすべてを物語っているといえよう。

〔四六二〕

いつのまにか髷長禿げているのなり

(路郎)

赤帽を被っているからいいものの、赤帽を脱いで汗を拭いている駅長さんの頭を見たらツツルに禿げていて俗にいう蠅すべりという奴だった。

ハッと思ったが、アハハとは笑えなかつた。ソレは多年の労苦の象徴としてうけ

とれたからである。一読ユーモアを感じるこの句にもそうした奥のあることを知らねばホントに川柳を味読したとはいえないだろう。

〔四六三〕

そのうちの一人はスリとして揺られ

(閑人)

乗合いバスと仮定してもいいだろう。窓を通して背後から陽をうけて、ウツラウツラとしている人、新聞紙を膝の上にひろげて、読み耽っている人、重たい荷物を提げて、くの字なりに釣革にプラスチックがっている人、種々雑多の人たちによって車中は混んでいる。悪道路を走るバスだけに客の一人一人が大きく揺れているが、その中の一人は絶えず機会をつかもうとするスリとして揺られているというのである。神経のこまかい句として面白く感じた。

〔四六四〕

御自愛を祈り己は二日酔

(五朗)

自分のことは判らないという人間の弱点を衝いた句だ。

「軽い脳溢血だそうだ。医者は少し安静にしていれはいいだろうと言っている。随分飲んだからな。仆れるのもムリはないさ」

と、先輩が枕をもたげての話。

「ご自愛を祈りますよ」と引きさがつまったもの、自分も二日酔だというのである。判っちゃいるけど止められぬ口である。

〔四六五〕

やめても食えるのがさからいもせ
ずつとめ

(旭童)

やめたらたちまち食えなくなるくせに、ベース・アップ、ベース・アップと次ぎから次ぎへとストをやって資本家にさからっているが、一方では、やめても食えるのに、さからいもせず、つとめている人たちのいるのを見て面白く感じたのである。勤めるということとは金の問題だけではないことを知ったのであろう。

〔四六六〕

勉強の虫入院をしても

(百万石)

入試を前に、胸を病んで入院をしたと見てもいいし、大人で篤学の士と見てもいい。入院をしても、本を放さないことを詠んだもの。表現上からいえば今少し感
激性があれば、もっと強い句になったであらう。

〔四六七〕

大都市の風景となる靴磨き

(宵明)

敗戦後十数年間は靴磨きが、路傍にズラリ並んで、道ゆく人たちの靴を磨いていた。それはたしかに大都市の風景の一つに数えることができた。外人ならずともカメラに収めている人たちもいた。ところが、それ等の靴磨きの中には無様な磨き賃を強要するものが続出してケンカが絶えなかつた。その後道路法違反の取締りが厳重になったの

か、近ごろは見かけなくなつた。この句はその頃の街の風景をスケッチしたものであ
らう。

〔四六八〕

年上の彼女何やら彼やら呉れ

(半休)

年上というだけで彼の女はひけ目を感じ
るらしい。そのあらわれが、物質の贈与と
なる。勿論恋人に対してである。

「これ、あなたに、どう？」と言つては安
からぬ品をとっかけひっかけ呉れるのであ
る。男が二枚目であることはいうまでもな
からう。

女性心理を巧くつかんでいる。

〔四六九〕

ジグザグも生きる道かと哀れなり

(孤呂二)

ジグザグ行進は必ずしもストには限らな
いが、ジグザグと言っただけで学生や労組
のデモ行進を思わせるほどに有名になった
言葉である。作者はそうした行動が、人間
として生きる道だとは哀れなことであると
その人々をあわれんでいるのである。

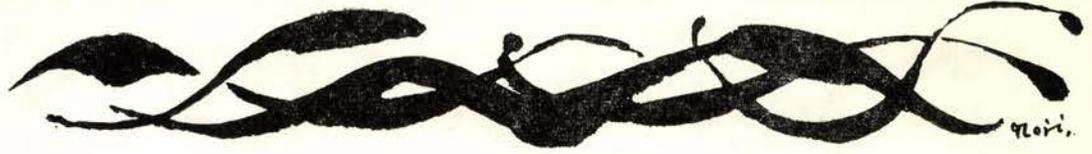


結婚式場 長生殿

近代的な設備をととのえた
関西一の結婚式場 貸衣裳も
豊富にそろえております ● 6階



大阪日本橋
松坂屋
TEL 631-1171



川柳塔

高槻市 丸尾 潮花

意見聞く膝は揃えたままでよし

テレスいっぱい花を植えても見たい日日

大阪府 西 い わ を

御機嫌となればソーラン節となり

雪景色京都の庭を想い出し

大阪市 北川 春 巢

おセチ料理の合理性子に教え

スキーもう見るものにして炬燵に居

松過ぎて畳のよごれ忘れとき

安産の電話どちらか聞き忘れ

女にはあまいと女すぐ見抜き

ワイマル 羽佐 間 柳 葉

父母の前だけは初めて会った人

背が低い高いと他家の娘の批判

堺市 吉田 圭 井 堂

いつの間か俺の票まで読まれてた

二の膳で百円会費の数珠つなぎ

埋立てに昨日の地図が役立たず

そのかみは赤で鳴らした社長にて

持つ者の強味相手の泣くを待ち

本心を訊く気盃置かさせず

岡山県 直原 七 面 山

全国手配の写真で夫の無事を知り

近付けば少女おんなの声を出し

女一人になって西瓜へかぶりつき

取次ぎがいる程息子出世をし

故武部香林御夫妻に捧ぐ三句

夫唱婦随死出の旅路へ発つ二人

死の恐怖を乗り越えて行く夫婦愛

足を縛って七生までも離れまじ

京マチ子のッ女の一生より二句

家の重みに押しつぶされて行っただけい

好き嫌い言わず主恩に生きたけい

大阪市 西 森 花 村

休みまでやもめほころび気がつかず

畳屋のような手付きでやもめ雑い

鳥取県 河 村 日 満

やくざ猟銃撃ち合い事件

死の町へ雪しんと降り積り

撃ち合いも知らぬ宵寝をからかわれ

豊中市 戸 田 古 方

森ばかり見ていて株にけつまずき

初風呂の人みな驚にみえてくる

大阪市 市 場 没 食 子

畳替えやっぱりせず年を越し

三カ日中年以上出たがらす

西宮市 若 本 多 久 志

三行で家出娘へ親の詫び

お若いと云われてみても六十二

人間ドック入り

世間並みのお見舞客に少し照れ

レントゲン曲った心を撮れとらず

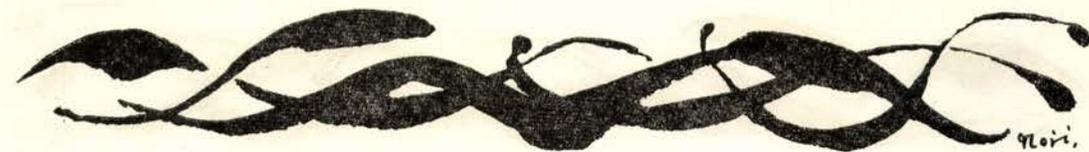
モルモットを扱うように検査され

大阪市 正 本 水 客

錆た釘の頭を打ちこむような処置

酔うて云うのやないと言うたを覚えてい

防府市 長 野 井 蛙



豊中市 足立 春雄
 泥だらけ代筆で来た年賀状

京顔見世を見て

まゆ一つ書けば千両の顔が出来

倉敷市 木村 千容

脚下照願喜寿を迎えたベレー帽

プレゼント俺には盆栽鉢なり

負け嫌い杖を持つとは云わぬなり

倉敷市 田垣 方太

マダムまた唇だけの微笑する

丁重にお帰りだよと追い出され

三月の川の流れにある色気

三月の池女子生も漕いでいる

大阪市 後藤 梅志

年賀状出してる暮の内に死に

日本語がきれいになっていた詩人

タラップへ足のもつれる子が走り

盗作はくさるほどある落選歌

横書でくる先生の年賀状

米子市 小西 雄々

わが子より若い巡査に叱られる

一輪の花に郷愁さそう駅

大阪市 山川 阿茶

ドテラ着て社用でおそくなる電話

日本髪へボーイフレンド一寸照れ

大阪市 金井 文秋

ねえさんのお古かいなとあなどられ

定期券拾うた方がやきもきし

加賀市 那谷 光郎

電化には遠くどっしり自在鉤

正座三人相談をしたポチ袋

下関市 桜川 不水

元旦の酒は三本どこでよし

初雪にころんだ方の子も笑い

岡山市 浜田 久米雄

春を待つ茶の闇明るうともしとき

テレビ見ている孫の目が動かない

岡山市 逸見 灯竿

給料は欲し北風は冷たすぎ

気の弱いわたしのような雲が行く

株を買う趣味忘年会へ来ず

出雲市 尼緑 之助

寝正月疲れた歴史の一ページ

呑むことをやめて寒月へ去に急ぐ

大阪府 清水 白柳

うたがいを晴らし外遊するという

釣池へ不況逃避もまじるなり

大阪市 水谷 竹莊

むかつてみても相手が部長では

カチューシャを唄う女で歳が知れ

鳥取市 杉谷 湖山

買わされた成長株が気をもませ

いつまでも待つ縁談を持ちこまれ

京都府 大鶴 喜由

孝行を強いるのんかと詰め寄られ

描いたり塗ったりへチャにしてしま

奈良県 飯降 白香

新年へ五十の夢あり歌があり

南無阿弥陀と口癖にいう母を持ち

奈良県 西辻 竹青

かつがれた事を承知で座る椅子

その人の名は言えないと酔うている

岡山市 服部 十九平



スモッグが今日はなかった初荷着く

無欠勤女教師扁桃腺が腫れ

手がもがれても人形の目が綺麗

初対面どちらも年を干文で言い

尼崎市 長谷川 三司

もう酒に飽いた顔して松の内

草原を馳け抜けけ子等若さを競う

西宮市 若林 草右

宰相の今更おそい人作り

子に買った漫画車中で読み終り

岡山市 田村 藤波

初夢を漫画もどきに子が語り

二、三尺おきに燕は譜を作り

岡山市 本田 恵二朗

マイカー族になって月賦にさいなまれ

社長と対座一から十まで恐れ入り

京都市 松川 杜的

賀状もう長男の名もちと混じり

たかが一丁先の略図がもう書けず

吹田市 橋本 幸男

パチンコ屋モーニング着た客も居り

目を閉じた姑くちづけさす姿勢

堺市 高崎 雄声

開店

三田の客にも愛想惜しみなく

島根県 藤井 明朗

好きだのに女心は反抗し

ストープへもう春斗の策なれり

鶏肉の馳走に飽きる雪の村

岡山市 永松 東岸

淋しさは眼鏡をくらべ合いしとき

コップ酒ビタミンよりもすぐに効き

背徳を作家は美しくえがき

倉敷市 野田 素身郎

パチンコの収獲話す事務始め

新春放談まず首相からこきおろし

大阪市 伊達 堰子

めずらしく子の成人で旗を出し

大阪市 不二田 一三夫

帽子のようちょっと脱いどく日本鬚

失恋を美しと見て嫁きおくれ

若屋市 丸川 初甫

ジクザクに抜けて出世をうらやまれ

岡山市 池田 古心

大雪に程度をなげくスキーヤー

東京都 石居 高志

実社会先ず微積から遠去かり

喜怒哀楽捨てて課長の座を守り

大阪府 早川 清生

晩年を汚す情婦のことで借り

新年の散歩が藪の墓地へ出る

大阪市 西田 柳宏子

初出飾るようにB.G.和服着て

初出の日もう相談は遊ぶこと

堺市 辻 圭木

辞書が風邪ひきそうに持ち歩き

口えらし昔の味を覚えてた

加賀市 中松 恒雄

寒のうち父親の愛に似て厳し

殺人の白魔ともなる牡丹雪

大阪市 児島 与呂志

アルバイトする娘いたわる父でした

初夢に天然色の青い鳥

西宮市 小浜 牧人

年賀状疎遠の友となるばかり

お役人自力で勝てた甚と思ひ

銀婚の愛は埋れ火燃ゆごとく

スキーかついで並んでは待ち並んでは待ち

名古屋市 菱 田 満 秋

腐ってるかも知れないと妻が食べ

消防車にも踏切りはままならず

娘一人般若をかけた部屋に住み

岡山県 池上 知恵美

成人式しっかりとした夢をもち

大阪市 橋高 薫風子

温泉のゆつたりとした手拭よ

降る雪に貧しきものが先ず隠れ

悼岩崎愛二氏夫人

山々も悲しむ雪の薄化粧

奈良市 宮口 笛生

住吉神社初詣

初詣でスリに用心とはかなし

天王寺動物園

今日の風キリンの首は寒かろう

大阪市 榎本 露見

家庭田満今日もコーヒの香が流れ

カレンダーをメモがわりにして妻多忙

大阪市 西川 晃

十二月三十一日も立読みし

美がどうのこうのと妻に養われ

鳥取県 田中 蛙眠子

雪しんしん選挙参謀寝もやらず

どんぐりが多く異動が殺気だち

男一匹用心棒という身分

岡山市 林 葵丘

よろこんでもろうてますとやしは売り

び笑び笑そのまん中に浩宮

仲人は墓の古さもみて帰り

角帽をかぶって野球やっただけ

神戸市 仲どんたく

公団が当らぬうちに恋が醒め

恋の手を水かけ不動へ合わす宵

スキー放り出して御年始帯をしめ

平田市 久家代 仕男

ふるさとは煤煙もなく鳶が舞い

快速車吹雪をくぐる音で過ぎ

大阪市 本多 柳志

通過駅ここにもあった正恵方

再考のチャンスへ遮断機が下り

休会中はしゃべり本会議は眠り

西宮市 野呂 鷲江

一人娘を褒めてくれたで酒も出し

失恋の苦を忘れ得るほど墮落

新潟県 高野 むじな

子の相手して三カ日みちたりる

大阪市 石倉 旅風

伊勢海老のフライにならぬ面構え

八十になって達者な無神論

ゴルフして居たら勝手に金が増え

真剣に日本語話す孫の口

大阪市 魚住 満潮

続西成界わい

死にたいと云う女に困る西成署

借金のもつれ竹馬の友を刺し

逢びきも仕事も同じジャンパーで出

やくざを癪めてとちよっぴり惚れており



初対面もう焼酎の話なり

愛媛県 村上旭童

出稼に有給休暇ある世が来

若いのをもろて冷水まさつとか

犬を呼ぶ口笛ぐらい吹ける妻

神戸市 傍島静馬

おべんちゃらざらいが父を無言にし

ひねくれぐあいだ盆裁値がちがい

布施市 森下愛論

二号まで抵当にして金を借り

大阪府 河井庸佑

勉強をさせる苦勞が報われず

大阪府 谷沢好祐

或日ふと子育てをする馬鹿らしき

投資するつもりか大きいお賽銭

泉大津市 高津徹也

障子紙祖母も明くれば米寿なり

死刑囚の夢或る夜は母親のひざのもと

鉄瓶の湯がもうもうと寝正月

愛媛県 横紫光

読心術彼女の心まだ読めず

無免許がいと簡単に人を轢き

青森市 工藤甲吉

どっと来た雪に貧乏うろたえる

雪の降る街美しいひと通る

フィギュアはそのまま天へ上りそう

十二月貸して取れないのがなぐり

じじばばはベビーコーナー見て廻り

松江市 小林孤呂二

霞・霞ニコヨンの背まるい

腰低くもうすぐ四月やってくる

松江市 舟木与根一

最高のすねを噛って山で死に

吹雪真っ向チップはずんだあほらしき

喜の祝飲めるのを見て安心し

金にあわせ間取りの夢を小さくする

豊中市 林夢虹

恋たのし花買うときも君のこと

クリスマスチャラッシュに座席取りぞこね

バタ屋の親父もベニー帽をかぶってた

大阪市 今西生薑

交通事故ドンキホーテも死んでいた

画家の目に肌をなめられたと知らず

銀翼の初日にスチュワーデスも染み

かすのこの王座今年も揺がない

ニコヨンのエブロン白い御用始め

あくび癖までも亡き母生きうつし

岡山県 横山一声

金策の話へお年玉貸したるか

自衛隊上りが守衛さんに売れ

顧問とは名のみ神馬の如く居る

小松市 関戸宗太郎

物置きを借りても株式会社なり

石川県 高山涼髪

屋根雪がどどどと落ちて朝寝する

女に生まれりゃよかったと出世せず

寺の娘も親の反対して嫁ぎ

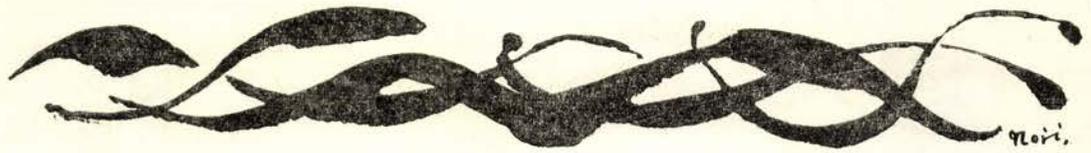
美称市 安平次弘道

事故現場怪我も忘れて撮るマニヤ

お隣りの金になる趣味に妻がふれ

宇部市 平田実男

裏面工作までして不肖私が



諫早市 川岡 靈眼子

會吉市 奥谷 弘朗

和歌山市 秋月 宏方

半生を雅号で暮し活き続け
ふところ温まり声までも太く

浮気したようには日記書いてなし
春斗のデモ男のヒステリーに見られ

佗しさはかめば音する総入歯
白髪にも心の若さまで消えず

大和郡山市 中内 孚彦

兵庫県 遠山 可住

大洲市 米沢 睦明

盗作の後の辻褃ソツ多し

オールドミスジュースにしたが気に入らず
月給順に座って心落着けり

綻びを妻病床で縫うて呉れ

貝塚市 杉本 一鶴

赤ん坊につづいてみんな笑いあう

コネばかり信じておった不仕合わせ

手術も効なく生きる人形となればとて

若旦那のうちに祇園を卒業し

今治市 長野 文庫

竹の節みたいなものなりお正月

病床のそれからシビン癖になり

おいといて利用する気の本が売れ

富田林市 浅川 八郎

兵庫県 河原みのる

同居さすゆとりは持たぬ蟹の穴

不潔視する十七才の父母検討

猫ババの本能少々もち合わせ

狂い咲き次のシーズンには居らず

岸和田市 内藤 きさ子

ぼたん鍋仲居は渡ったように云い

元且に当てられる馬鹿当てる馬鹿

しめ縄の威厳へ日本明けかかり

梅日から歌い続けているテレビ

今治市 月原 宵明

ホロ酔いで釣銭くれる松の内

夜の雪四十七士が出て来そう

青森県 木村 凉人

同
舟
近
詠

薬局の蔭で男は待たされる

ピニールの内は季節を知らぬ花

椅子一ツ仲居二人でめしにする

山高し小さな愚痴はやめにする

冬しんしんとロシヤ民謡聴くテレビ

須坂市 高峰 柳児

名古屋市長谷川 鮮山

大阪市 唐崎 専翁

貨車庫で旧家が生きる塀を交え

まどろんだ夢の人生古稀来る

女秘書あまえていい場所心得る

ふっと話題反らし花ない橋渡る

少年の儘年輪の皺をよせ

振り向かぬ歩調となった暮の街

少しずつ妻と減らした特級酒



今井鴨平氏

今井鴨平を語る

河野春三

1

「今井鴨平」と「河野春三」と並べて見ると、そこには、あまり目立った共通点はない。

性格的には彼は大人の風格があり、私はいつまで経っても一個の文学青年型であり、彼のように洒脱な磊落な、無頓着な、こだわらない性格は私には全然ない。

それにも拘らず、何故か彼は私を常に庇護し鞭撻し、激励し、心友としてのあらゆる情愛を示してくれる有難い友人である。

川柳に入ったのは、彼の履歴書（地上派4号）によれば私よりは遙かに遅いが、年令的には四つばかり彼が年長で、多分石原青竜刀氏と同輩位であるが、私は、年輩だけでなく、川柳の上でも先輩のような気がしてならない。それほど彼が抱擁力に富み、作家としても私よりはたしかに一枚上

の存在であり、何かにつけて見貴らしい条件を備えているからであろう。

彼は一昨年秋私が「現代川柳への理解」の出版を本誌同人石曾根民郎氏に依頼するため、信州へ行った途次、久方ぶりに岐阜で降りて、彼を訪ねたが、大いに飲んでくれ、私の原稿のうす高い量を見ただけで、同席の清水汪夕君と共に、驚きの声を上げて私を心から労わり激励もしてくれ、何とかいう岐阜の名料亭に連れてくれて、心からのもてなしをしてくれた。

本が出てからもその主宰誌を通じてPRに、又批判特集号を出してくれたり、彼の友情は、私にとって、山村祐氏と共に終生忘れ得ぬ存在である。然も私のことであるから、彼、ならびに彼の柳誌に対しては常に仮借のない批判や注告や提案をするのであるが、それらの殆んどを、理解してくれ、実行に採り入れてくれている。

現代川柳作家連盟が発足して以来、彼はその委員長としての重責を果たしたことは勿論、ジャーナリストとしての一面をもつ彼は、遺憾なくその面目を発揮して、よく今日まで多大の犠牲を払ってきたことは周知の通りで、昨年から「川柳現代」に踏みきって、綜合誌のあり方で、号を追う毎に内容を充実させているのは彼の實力と、彼自体の魅力の賜物と言ってよいと思う。

鴨平氏は川柳界に入ったのが昭和十四年というところで「こがね」「うかご」の伝統誌を経て、途中、番傘から同人に推薦されたこともあるというから、伝統川柳から次第に脱皮した革新系作家であるだけに、戦後派ではない筋金一本通っていることは見逃がしてはならないことと思われる。

彼の説くところによると、昭和十七年

頃、冬起夫、凡石、愛香等と「いぶき会」を結成したのが、革新の萌芽というべきで、戦後篠田半面子から「うかご」の編集をうけついでから、「うかご」が、上松爪人、松野暮郎氏等の伝統派と、鴨平氏等の「人間派」作品欄の共存のままに、県下の新進作家を養成したのが今日の岐阜革新派の基盤となっている。

爾後革新系「人間派」を手始めに、汪夕君と「創天」「地上派」毛利満若と「無形像」を出し、遂に「現代川柳」から今日の「川柳現代」へと、着実な歩みを革新系柳壇に示して来た。

元米が短歌から出た人であり、岐阜に於いては文化人としてジャーナリズムにも乗っており、近くは俳誌「青玄」同人に加入して俳句の世界にも足を突っ込んでいるが、いずれも名目だけではなく、実作品を、而も多量に作る驚くべき精力家であり、その「青春性」はまことに不思議という外はない。

彼は私の「特詩無性」の説に早くから共鳴して、ジャンルや分派に拘泥せず、先輩後輩の区別もなく、誰にでも会えば十年來の女のごとく、自由に、深慮せず、思想としては中正穩健で、敵というものがな

い。そこに又私としては物足りないものがあるが、あまりにも無頓着な発言や八方美人的な在り方に反撥を感じて彼に直言をするのであるが、おそらくは彼と私との性格の相違の然らしめるところで、新しい川柳へ

の情熱に対しては、共通の理念があるものと信じている。

2

彼の川柳作品は、経歴も水く、且つ多作主義で、すべてに目を通すことには思いも寄らぬことであって、それを一々批判することは不可能の一字に尽きるが、その底を流れるものは、リリズムと、ヒューマニズムとはあるまいか。彼が短歌から川柳へ入ったという道程には、「抒情」という要素が、知らず知らず身につけていることは、疑えぬ事実であり、戦後、生活面に於いて、協同組合運動に没頭したり、迂余曲折の生活変転のうちに体験した思想と生活体験がもたらした社会性が、彼自身が享有するヒューマニズムと相俟って、今日の鴨平作品を構成しているとは見てはいけないうか。

(一) うかご時代 (昭和二十三年頃)

紙屑の白き自嘲に今日も暮れ

鴨平

風雨とき心に窓を閉めもする

同

朝すかしゆえにたつきの火を燃

同

やす

同

人間の欲あらわなり爪が伸び

同

ここでは現在の鴨平作品とは似ても似つかぬ単純な思考から生れた身辺雑詠でしかないのはその時代としてやむを得ない。

(二) うかご時代 (昭和二十六、七、七年頃)

熟柿落つ宿命にぶき音をたつ

鴨平

寒の水ごくりと飲みし影を置く

同

丘あればまほろしの塔建てて住む

同

冬の空青く鉄骨ほろびたり

同

政治家も人間である爪を剪れ

同

前時代に比して稍々内面的なものが見られ、批判精神がうかがわれる。句の構成力は、格調高きものが、そろそろ出て来ている点に留意したい。

(三) 人間像時代 (昭和三十年頃)

山重なりこの雪みちに毘ありぬ

鴨平

麦穂搏ち合い搏ち合うここにも基地

同

夕焼雲崩れては孤児に孤児の影

同

くろい傷口をさがす一人きりの壁

同

犬の舌真つ赤に遮断機がある

同

この時代になると初めて作家鴨平の位置が確定して佳作である。彼の内部に包含する社会批判と、人間性探究と、詩的イメージが渾然として、川柳の今日性を明確に示している、而も革新派に共通する難解性が全然なくて誰の胸にも共感し得る伝達性を見出すのである。

(四) 創天時代 (昭和三十年)

オヤンこんな暮景の中の白い米粒

鴨平

蟻一列に明日への行進である

同

(五) 地上派 (昭和三十一年)

今日の亀裂の青い海見ていた

鴨平

巨大な火柱のやがて天に還るのみ

同

善人の貌して雪のみちまにころび

同

それでも影がある糞尿車のまひる

同

今日も汚水と不渡り手形のゆうぐ

同

この時代になると、時代的な一般的な流れに沿って、漸く五、七五、十音字定型をふまえ乍らも、そのマンネリズムに抵抗を覚えて、彼自身の内在するものからの自然のリズムが生れ、破調から自由律へ、文語から口語への自然的な移行が観取出来る。

麻生路郎氏は「雪」時代から「川柳雑誌」を通じて現在まで十七音定型を中心としつつも、ある点の破調や自由律をも許容せられてある作品が相当あることは、彼の句集「旅人」に於いても散見出来るし、二行作品のかなりあることは、葎乃女史の「福寿草」に於いても同じであるが、番傘のように絶対的な定型固守とは稍違うようであり、これはいわゆる三要素を是認しながらそれのみに拘らない広い意味での生活川柳に足場があり、精神としては川柳作品も「詩人」であるという自覚によるものと解釈されるが、そういう意味から、鴨平作品などは川柳雑誌の作家にも、或点の理解と共感が得られるのではなからうかと私は思う。

鴨平氏はその後、毛利満若氏という新進作家と共に「無形像」を出して月刊を確守した。ここでは、主張らしい主張もせず(従来もあまりエッセイは書かないが)、作品は相かわらず多作であったが、大した進歩はないようである。

(六) 無形像時代 (昭和三十二年)

父母の記憶の海せりあがる

鴨平

あ、腐蝕する煙突の手よ妻子あり

同

火事跡で笑えるせいっぱいの笑

同

川柳濁水主婦らヘタのないトマト

同

買う

川柳現代 (昭和三十六、七年)

今日も階段のぼる一馬身の差で

鴨平

颯風圈反れ月の果実を嚙む

同

裁かれるごとし天日の木菓噛めば

同

靴の尖端暗示のない黒幕ひかれ

同

鴨平氏は今、「川柳現代」の仕事に没頭しているし、私財をつぎ込んで、気魄一ぱいにこの雑誌の成長に一身を賭けている。私は考え、私は私なりの出来得る限りの、彼への援助を期しつつも仲々思うに任せぬ焦慮に日々責められている。彼のような稀れに見る、現代川柳確立への情熱を無条件で、推進して行くような人は貴重そのものである。屁理屈やあげ足とりで我物面をしている革新系の人達の多い中で大樹のような存在、今井鴨平の健在をのぞんでやまない。

彼の性格と日常生活については、本誌でお馴染みの岐阜在任の東野大八氏等に聞く方がもっと面白い話がかかれることと思ふ。



浪人ぐらし

東野大八

昨年十一月限りで、ほくは浪人になった。

ほくの社は足かけ三年チョット、この間になんと四億からの金をかけた新聞社だったが、作るより崩すが早し、の響の通りアツという間に跡形もなく消えてしまった。

創立当初、会社の幹部の一人だったほくは、なんでも紙を黒くすれば売れた終戦直後のころとこと変わり、田舎で新聞社経営にかかるなんてことはどだいムリな話、今はテレビ、ラジオ時代だぜ、三年のヤマを越さない限り社はいいつたってパンクする。とコトあるたびに社員連中に放言していたものだった。

「だから、君たちはヌキ身の自分を鍛えることを考えろ、新聞記者なんてものは、新聞社という背景がなくなればコマ以下の人間としか世間はみないんだ。殊にこんな田舎では目明しか岡っ引き

の成れの果てとしかみないんだぞ」

これがそういう話の後のほくの締めくくりだった。

社の社長や専務などは、ほくのこの言動にもとより不満だったらしいが、中堅どころの連中とガツチリ固まっているほくにはどうしようもなかったようだ。いうなればこんな仲間の連中が、前の社からこのほくを担ぎ出してくれたんだから仕方がない。前の社をおん出るときにも、新しい社がどれだけモツか、二年とは続くまい。とこ

連中にきめつけておきながら、ほくは気前よく社をとり出して、社長らもその点を呑み込んでいたので、ほくの放言にもニガ笑いしてすませていたというわけだ。

こうと思えばすぐその足で二階からと降りるようなほくの性分だけに、仕事のできる気のよく合う連中が、一緒に苦労しようや

ともちかけてくるところからはもうヨワイのだ、それに義理までから

んだのではどうしようスベもない。いずれにしても、ある日履歴書を書いてみて、その波乱万丈のわが身の足どりにはわれながら感心もし、あきれかえったものだ。

「明日をも知れぬケチな社で、骨身をクズって病氣してしまいうり、早いとこそそんなところはカタがついたのでよかったわね」

と女房は負け惜しみだろうが、そんなことを言ってお慰めてくれた。しかし、安月給とて、もうキレイさっぱりと縁が切れたのだ、と思うとほくより家内の方が内心がっかり気落ちしてしまっていることは確かだ。

街で同じ社の一人にあって、久しぶりに飲んだところ、彼は、社解散と同時にここからなる安息としみじみとした解放感を味わい、拘束のない人間生活の自由を

満喫できた大喜びしていたそうだが、それも十日か半月がヤマで、いまでは買物かごを下げ、マキを割り、めしまで炊いているそう。おかげで女房はノホンとできていいだろうと思っているとき、に非ずで

「安月給で一貫目もやせて、眼をつりあげて休日もないひところのあんたの方が、なんほ苦味走っていい男だったかしのないワ」

とことあるたびにいうのだ。女房稼業にとつて、遊んでいる亭主を持つほど侮辱はないとみえるね。とこの相手、こういって濃い無精ヒゲをなでたものだ。

いまテレビ、ラジオで大活躍をしている唐島基智三氏は、昭和二十五年の追放組の一人で、丸三年も一文の収入無しでガン張ったそうだが、そのときの借金が今も尾を引いている由。しかし、金を借りただけのことなら金ですむが、金でない恩義をかけてくれた人は、恩借が残っている。それだけはどうしようにもテがない。とよく話に出して語るそう。

今のほくにはそのようなものはないが、あるバーのママの一人が、ほくが失職した当座のこと、こういったことがある。

「あなたには随分賃がある。だけどつぎの暮しがたつまで無利子で待ってあげる。だからこの金はそのときまでとっておきなさい」

とこちらの内金を手もつけずに戻し、その上、立派な送別会までしてくれた。こういうのを恩借というのだろう。

そうかと思うとこんなのもある。家の近くに職業安定所がある。五年前新築したとき、県の経済部長といっしょの車で結構なその支那に着き、モーニングの所長以下に迎えられて入ったものだが、その応接室で

「いまはこんなエライさま待遇ですがね、そのうち向うの寒々としたベンチで失業保険の金を勘定することになるかもしれませぬよ、その節はよろしく」

こちらも向うも穴語のつもりでそのときこんな笑い話をしたことだが、これが笑い話でなくなったのだから人生残酷物語である。ほくが第一回目の失保受領に出かけたときそのときの所長と顔を合せた。

「やあ」
と思わずこちらが言ったら、向うさまは声が出なくて、年甲斐もなく一寸顔を赤くしてテレてしまった。その恐縮した顔にこんどはこちらがテレて
「何分、お手やわらかに……」
と丁寧に、素直な頭の下げ方をした。おかげで今もってこのほくに対する窓口は懇切丁寧で、お役所仕事を感しさせてくれないのは有難い。これもかそけ恩借の部類に入る方かもしれない。



七 脳溢血

脳溢血は前に申しましたように、何の前触れもなく突然起こることが多く、起こりますと意識不明になって、そのまま死んでしまふことが多く、また意識が回復して死なずにすみますが、後に中風と呼ばれる状態が残りますので恐れられておるわけでありませぬ。

たまたまのたより脳溢血と聞く 路郎

雄図空しく停年後の中風 雄声

た 脳溢血事前協議が欲しかった 曉明

最後の句は、「事前協議」という言葉が句の生命であります。事前協議ができないのが当然でありますのを、事前協議をして欲しかったと、やや逆説的に詠んである処が面白いであります。

病氣と川柳

完

北川春巢

八 病人

最後に病人の句を集めてみました。句には「病人」とあるだけで、どんな病気の病人であるかは、句の上では分らないのでありますが、どんな病人でも病人の心理をよく現わしていると思われる句を集めてみたのであります。

病人へみんなたかつて嘘を云い 豆秋

これは病人の心理であるばかりでなく、介抱をする家族の者の心理をも詠んであります。

お酒でも出せと病人気を使え 春巢

お見舞へ足の細さを出して見せ 恒雄

鼻を見ているとも知らぬ見舞客 旅風

重患もええ看護婦を知って おり しげを

少しなら飲んでもという医者 者に替え 清生

飯糰へ余裕を持たず病上り 牧人

黄胆とひとがいうたで診てもらい 春巢

「少しなら飲んでも」の句であります。これも酒の句であります。病人というか、人間のいやしんぼの心理が実によく出ています。思うのであります。

ところで、酒を飲んでもよいという病気にどんなのがあるかと調べてみたのであります。医者の方から申しますと、酒を自由に飲んでよいという病気は全然ございません。急性の病気ではどんな病気でも酒は絶対にいけないのであります。慢性の病気でも脳や脳膜

の病気の多く、また心臓病や胃潰瘍、腎臓病、肝臓病などは酒はいけないのであります。「少しなら」という種類の病気もないことはありません。それは、胃腸病の急性期を過ぎて回復期にはいっても食欲が全然出ず、ために衰弱がひどくなって、酒を飲めば食欲が出るというような場合であります。

「まあ少しなら」と許可するのではありません。また糖尿病患者で、米飯やパン、メン類などの含水炭素を制限している人に、カロリーを出す場合酒のアルコールが役に立ちますので、余病のない時に限り「一定量」をきめて許可することがあるのであります。余病としては腎臓病や神経炎が起り易いのですが、こんなものがあるかと許可するわけにはいきませぬ。

なお、句はありませんが、ついでに煙草のことについても調べてみました。煙草も自由に喫つてよいという病気はございません。特に呼吸器病や心臓、血管病の人には煙草は悪く、また胃腸病でも急性期はもちろん慢性期にも、食前の喫煙はよくないということでありました。「適量」なら

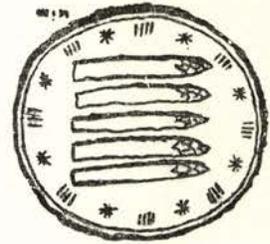
ば許可してもよい、という病気として、慢性便秘症で煙草を喫うと便通がよくなるというような人、また食欲が旺盛すぎて肥満症の場合に食欲を抑えるために喫わずことがある。と書いてありました。また煙草は中毒を起します。で、その中毒のために、煙草がなければ死んだ方がましだ、とまでいう老人がありますが、そんな人には分量を制限して喫ませることがあるとのことでありませぬ。

筆者・医学博士・川柳人

コクヨ 箋
便

評句

リレー



大 阪 市
下 関 市
岡 山 県
京 都 市

市場 没食子
国 弘 半 休
直 原 七 面 山
大 鶴 喜 由

健康な乳房が揺れる拭掃除

雄々

没食子―先ず「健康」という標語がある。人生において何をさて置いても、健康な程幸福な者はないだろう。よく齢老いて金の無いのは首の無いようなもので、寂しい限りであるというが、たとえ有り余る金はあっても病弱では喰べ物一つにしても、レジャーを楽しむにしても心底からの幸福は味わえないだろう。そんなことを思うてみるとこの句健康に恵まれ、幸福なそれでいて明かさも味わえ然も若さも想像できて、編集子の言われるように官能も刺戟されそうには触れないでよく。

半休―前以ってお断りしておきますが私は古川柳に愛着を持っている一人であることを。
そこでこの句を讀まして貰ったときなんと主題をうまくとらえ、(上五)生活の一瞬を、(下五)微笑させ乍ら、(中七)読下し得

た立派な技巧だなと思いました。強いて悪評すれば「健康な」の熟語から受ける語感位のもので以下すらすらと読んだ感じが内なる一幅の絵画を見るような感じになりました。たとえその人物がお女中であろうとお母さんであろうとそれは今言わないことにしましょう。

七面山―ありそうで実際にはあり得ない想像句ではなからうか。私は別にこの句から官能も刺戟も受けたい。どちらかといえばキレイごとにとつて川柳的なあくがなのが誠に淋しい。

健康なは蛇足か、葉屋裏をさらけ出した感じがしないでもない。恐らく私なら、熱れ切った乳房が荷になる(邪魔な)拭掃除とか拭掃除揺れる乳房もリズムミカルといった風にもっと野趣的に表現しただろう。

喜由―句評に直面して思うことがある。それは読者から自分の力を試験されていることである。だ

が自分を曲げてお座なりでありたかない。

昔は嫁入り前の行儀見習というて田舎から娘が都会に出向いたものだ。紅のたすきに乳房が円く区切られて揺れるこの健康美な田舎娘が頭に浮かぶ。二年程して修業が成って帰って行く。都会の娘の小さい乳房に對し太い乳房の田舎娘を心に描くのは少しひやくのしすぎであろうか。そうでも受取らねばこの句は頂きかねる。乳房が揺れるところに味はあるが娘盛りとして評するには何か表現に足りないものがある。

没食子―半休氏の一幅の絵巻云々と私は一寸違いますが、この句を今は亡き、谷脇素文さんや、細木原青起さんに見せたら、たちまち漫画がでさるだろうと思う。七面山氏の言われる「健康な」は蛇足とも思うが、この場合適切なのが見つからなければしかたがない表現だと思ふ。それから私ならと示された句はほんとに佳句だ

と感心する。然し人、人によって行き方が違うのでこの句はこの句で味は十分にあると思う。喜由氏には別に述べたこともなく共感ですが、この乳房の持主を田舎娘と極めるのは一寸早やすぎはせぬか。

半休―一幅の絵になると言ったら、むしろ実在しないことではなからうかとの御意見が出たのでその辺から話をすすめてみましたよ。

絵と漫画とは正確に言えば別されるものであろうがこの場合俳画でも漫画でもかまわない心算で言っておいたので、この句を絵にする場合人物はお女中、季節は初夏、所はお屋敷の庭に面した廊下、更に小犬をおいてお女中の動作を活かすといったものをお願いしたい。こんなところは往來やサラーマンの家庭ではあまりご主人の目にとまらないことで実在云々々は見た例がないと解しておきたいと思う。それから「拭掃除」という字の意味とこの場合の言葉からくる感じであるがこれは巾掛けをしているところと断定してはつきりしているからこれも蛇評になるかも知れないが申上げておきましょう。句評は数人で句をばらばらに解いてしまつて放つておいたので句主に済まん。どうか皆さんでまとまりをつけておいてもらいましょう。

七面山―私が「実在しない」と言つたのは決して半休氏の「絵」

の問題からではない。

言葉の上でだけならともかくも、どう考えてみても、胸でも張って走っていればそのような情景も目にするのができようが、下を向いて掃除している位のこと、乳房がトントン人目につく程そんな揺れるなんて私にすれば全くのナンセンス。ストリップ劇場でならまた別問題。

又私の考え方を五、六人の女性に問い質してみても誰一人反対しないので私は自信を持ってあ言つたのだが、他の評者の方々は「ある」と認めての御発言なので今更なにか言わんやであります。

で私は、自分が自身の乳房の揺れを自覚しているのだとしてあの例句は挙げてみたまでのことである。が、その現象の実在が真実どうであれ、私は句が絵になつたのは、否漫画になつたのであつたのではもうおしまいだと思ふ。

そんな句に生命などあろう筈がありません。思えば私達は、句が漫画などには表現し得ない、奥深く味わい深い句を作ることに精魂を傾けて努力しているのではないだろうか。近頃の大方の川柳作家の方々は、漫画川柳の域はもうとつと昔に卒業されてしまつていくものと許り思つていたので、私の考え方は非常に甘かつたことに気付きました。

しかも三氏の句評をとおして私

は大いに勉強しました。この点は厚くお礼を申さねばと感謝しております。

喜由—この句に限らず句評に出される句は何か言って欲しいから出されるのではないだろうか。没食子氏の評のように健康で働けることの幸をおう歌していると思ふ。しかしそれ以外に何か訴えている。それは俗にいうお色気でない人間本能の尊いそして美しい色気であると思う。一寸上五と中七で健康の表現において聊か重視することも考えられる。

半休氏のこの句を絵にする場合云々に共鳴したい。次に七面山氏の乳房は揺れぬとのお説はうなずけぬ。試みに乳房を下に向けた場合を見て下さい。勿論同一人で生理的に緊張の日もち緩の日もあるが。それから絵とか漫画を排けきされるが成程漫画にはこ張とこつけいがつきまといてと言われることはうなずけるが。絵にすればこんな情景になることまで退けられるのはちと酷ではないだろうか。

金魚だけ一家心中へ生き残り

紫光

没食子—今年も歳末が近づいてきた。この句のような悲劇がまた、新聞の三面を埋めたり、週刊誌のトップ記事になるような出来事も予想される。恐らくこの句生之苦からの一家心中ならん。一家の悲劇も知らず平常通り無心に泳いでいるかの如く見える金魚も、思いなしか時々浮び上っては空気が

を吸っている、とも受取れる。そのうした情景の金魚は、それが愛玩用であつただけに一入の哀れさを増さされる。一巻の物語りを閉じるに応じ句だ。心中という悲しい出来事と、平常通りの金魚の対照も取材として佳。

半休—この家には人以外に猫も飼っていたであらうし、ひよつと知らぬが何れにしても家の中皆んな死に到り水中の空気を吸つてる金魚だけが生き残つたとすればちつ息死でもあらうか？稀有のことであります。

然しこうした誇張表現を真に受けて理くつを言うことはよした方がよいと思います。この場合心中そのものの哀れをさそふものとして受取り、作者の意図へ共鳴致しましょう。

七面山—金魚から受けるイメージが一家心中の悲惨さも言語につきたる哀れさをも美化してしまつて、それらを全く解消しにしてしまつていゝのはなんといつても惜しい。しかし半休氏のちつ息死はちと行き過ぎではなからうか。金魚は猫か犬にとつて代つてもいいが私の考では出来得る限り人間に近い動物であつて欲しい。

例えば「小猿だけが一家心中へ生き残り」のうらな風になれば私の言う悲感をも強調され句も心中者も世人の同情を集め得て救われるのではなからうか。がいずれにしてもこの句は誠に美しい恵まれた一家心中をひょうちょうとしてゐることに間違

いはない。喜由—俗に「そうですか川柳」がある。説明してしまつて余いがない。しかし作者はこゝまでは連想出来るが無理を言う。さてこの句がそうだとはい言わないが多少臭いがする。

心中へと心中にと「へ」と「に」を考えるとこの場合「へ」の方が良さそう。検死の役人にも身内の人にも金魚の見る瞳に差別はない。あぶくを出してはまた忽然と沈んでいく。非情かは知らぬがこの場合生き残る金魚のあわれが主で、人間のあわれは副に位する。

没食子—喜由氏の「へ」と「に」との是非は御説の通りであつて原句の方が良い。また「へ」は「え」であつた方が現代的でないの知らぬ。七面山氏の説の金魚はそれよりも人間の身辺に最も近い動物の方が、にはうなずけるし、半休氏もそのような御意見である。ただ私は小猿が一家心中にもう一つピタリとない。誇張表現をすれば面白いと思うが、広く家邸に密接な関係のある生物の方が一層の悲哀感を増さしめるのではない。

そう思えば金魚であつた方がよいと思ふ。半休—この句を再読して気付いたという訳ではないけれども、作句上心掛けねばならないことは上五、中七、下五の調和ということがこれにうまく行かないとこの句のように、金魚から受ける感じとだけ生残りという悲哀が変化して誇張して言つてゐるみたいを受ける

ようになりませう。だから推敲するとするならば悲しさをさそふものに置きかえてみることも良いと思へるし又一家心中から起る推理を利かすことによつて悲惨な感じをさそふものに仕上げる事が出来るであります。何れにしても稀有の事件であるだけに扱いにくいことにちがひありません。

七面山—喜由氏の人間の哀れは副えものにはなんといつても賛成し兼ねます。恐らく句主は、金魚をとおして一家心中の哀れさを強調し得たものとして一応安心しておられるのではなからうか。

そつてなくして喜由氏の言われるように金魚と哀れさが主題だとすれば、私はこの句の価値は半減してしまつたと断定したい。

没食子氏説のように小猿は確に行きすぎで、これは牛にした方が効果的だ。さて、金魚から受ける感じはどう言つても貧ではなく確に富である。そしてそれは全く反対に一家心中から受ける感じは富ではなくて正しく貧である。

この貧と富の対象がこの句の中に存在して句のバランスをとつているのであるが、実はこのバランスが曲者で、このためにこの句は佳句としての条件を欠き、力強く読者の胸を衝き読者の共感を呼び起こすことのできない大きな悪材料になつてゐるということに私は注目したい。およそ川柳句というものは、アンバランスの世界（破調）にその

良さがあるのではなからうか。余り句にバランスがとれ過ぎていゝこの句のように、句が力強さを失つてしまひやもすればキレイごとになる危険を多分に含んでいるものだと私は思う。

喜由—私の言わんとするところはここに写真家があつて人物をハッキリ撮らうとするには背景をほかすべしです。勿論違つた意味で両者をハッキリ撮ることはあり得るが、この句のように哀れさが両方共となるとうんざりさせられる。人間の勝手さがそうさせるのかもしれないが、どうせ計画的の死なら生きものことに飼うてつすもの位の処置はして実行するべきではなからうか。そこに何も知らない残されたものあわれさをつくづく感じさせられる。これが私の死の見方と考え方です。私なら母の死に對し嬰兒はそれとも知らず解放感に嬉々としてそのぐるりをはい廻つてゐるところを捉え

(担当真鍋一瓢)

振る舞い 食欲不振 疲労 欲 神経痛 肩こり 便秘 つかれ目

タケダ薬品

アリナミン

無臭性 アリナミン F



窓口談義

麻生路郎

川柳改称問題に与う

「川柳」という名称は世間から、狂句と混同されて面白くないと云うので、明治末葉以来川柳の新傾向と呼ばれていた革新派からも、伝統派からもたびたび改称問題が起った。

「短詩」がいいだろうというので、機関誌「短詩」を出した社もあったが、世間からは矢張り川柳として扱われていた。しかも、全国柳誌の多くは、それに同調せず、呼びなれた「川柳」でいいではないかという意見だったので、「短詩」改称は実現しなかった。しかし改称問題はそれでストップした訳でなく、「寸句」「草詩」「新短歌」「句」其他の改称がおこなわれ、何れも提案者のグループが実行にうつしたに過ぎなかったが、それすら、いつのほどにか立ち消えとなり、そのうちに

川柳が社会化されて来て、今日の如く「川柳」という名称一本に絞られてしまったのである。それでいいという訳ではないが、そこへ落ちついたのも一般の世論が、そうさせたのだといってもいいだろう。

ところが、数年前、石原青竜氏が「川柳」を「諷詩」と改称してはという提案をされ、自ら「諷詩人」という機関誌を出されているが、これとても弘く柳界からも、世間からも反響がなく、一グループだけの改称に終わったようである。今日では諷詩は諷詩であって、川柳ではないといわれていられるのか、そこところは寡聞にして知らないが、はじめ諷詩と改称してはという意見だったと記憶しているのだから、改称の一例として挙げたのに過ぎない。仮りに諷詩人のグループの人たちが、他誌の用句評をするに際しても、他誌の用

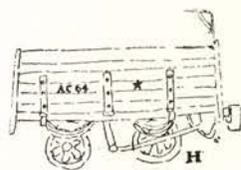
いている川柳の文字を勝手に、諷詩の文字と置き替えるわけにはいかぬから変なものとなることは必定である。

その点、斯うした改称問題は、たとえ名案であっても一社の力ではどうすることも出来ないものである。

私たちも曾て改称問題を試みた経験もあるのだから、短詩の内容の一端をも表示していない現在の「川柳」という呼称を最上のものとして満足している訳ではないが、さて誰れ人をもうなすかせるに足る呼称を案出し得ないので、おとなしく「川柳」の呼称にしたがつているのである。そしてその後は改称などは問題にせず、川柳そのものの内容をよくすること、自分自身の人間を磨くことの努力によって、世間から「川柳」をすぐれた短詩として認容してもらうよう外に、手はないと思うに至っているのである。そして現在ではそういう努力が少しずつでも、実を結んできたことによるこびを感じているのである。

ところが最近、またまた正木竜樹氏が川柳改称の問題を取上げ、「川柳」ではいけないから「新俳句」と呼称しよう、と、新俳句社を創立し、「新俳句樹立宣言」なるものを配布された。その意気は壯

石見路を行く



・大西八歩・

す樗益の良さを喜ぶ人達は、段々新しい世代の隅っこに追いやられて、プラスチック製の類似品の出廻る現在では、この原始産業に近い挽物業は衰微の一途をたどるばかりである。「大森にお盆を造ってる家があると聞いて乗ったんですが、何という家かご存じありませんか」僕は隣りの座席のお爺さんに尋ねた。少し耳の遠いらしい老人は、それでも一寸考えて「ああそれなら散髪屋をしているKさんの家でしよう」と答えてくれ、外来者の僕をうさん臭そうに眺めた。

島根県^{にま}遊摩郡大森町。これが石見銀山の猫^{にま}いらずで有名な大森町の現代名である。僕がこの地を訪ずれたのは去る昨年十月十九日の午後で、島根県の日本海沿いの仁万町から、大森行のバスに乗った。一日数回の旧型バスには丁度今日大森の秋祭りとかで可成りの乗客があった。僕の大森行の目的は樗材の丸盆の買出しである。最近木製の盆類は製造元が段々少なくなり、鳥取地方でも市内は皆無に近くやと辺境の若桜町と智頭町に一、二軒の業者があるに過ぎない。

布切れで拭けば拭く程光沢が増す。そこから大森の町となり、点在

とするが、この宣言書には多くのムジューンが発見されるし、このような重大且つ至難な仕事の発表方法に關して燃焼不足の点が少なからずありはしないかを憶うものである。

詳しい説明は省くがごく簡単に考えても、斯うした重大な提案は改称によって忽ち影響のある全国の多数の吟社や多数の柳人に、先ず、「川柳」の呼称を改称する必要があるか、ありとするならば、その理由をという、アンケートをすることからはじめるべきではなからうか。

そしてアンケートの結果が、何れにしても改称に賛成する、現在の川柳よりも、よりふさわしい改称なら賛成する、現在のままでいいではないかと、いろいろと意見が出るに違いない。そして回答の多数が改称の必要がないというところになった場合、しかもその理由に、改称するよりも現在のままの方がより妥当性があるとの意見が多数であった時には改称問題の提案はいさぎよく取り下げてしまえば、それで改称問題も一応は解決されることになる。

仮りにオール吟社、オール川柳

人の支持を得て改称するとしてもその名称その発表方法については、更にアンケートを出すなり、全国から委員を選んで種々と協議を重ねることの必要であることは言うまでもないし更に識者の意見などを徴することの慎重さも必要であろうから、一年や二年で結論の出る問題ではないと思う。すつたもんだの結果、適当な改称が得られたとして、これを世間に発表

しても、世間が改称を認めて呼称してくるまでには五年や十年の歳月では到底実現するとは思えない。曾て川柳と狂句との混同を投句家や世間の人たちに知ってもらうために、私たちが、明治から大正へかけて、どんなに多くのギセイを払ってきたかに想到すると、実に容易ならぬものがあると思われるのである。要は次代の川柳人にそうした重荷を背負せても改称するだけの理由があれば私たちが賛意を表するにやぶさかではない

が竜樹氏一人の案とも思える新俳句社を創立し、いっしょに「新俳句」の名称を押しつけ、右へならえと言ったところで、みんなが、そうヤスヤスと協力する時代ではないかと思うがどんなものである

う。おそらく紙とインクのムダ費いに終るのではなからうか。竜樹氏の川柳を思う熱意のほどは買うが、一歩も二歩もしりぞいての熱慮がのぞましいと思う。

仮りに現在の俳句を革新して新俳句と称すると言うのであれば、明治が大正時代に俳句と違った革新の一派が新俳句の名称を用いていた事の成否は別として語義は成り立つであろうが、現在の川柳をそのまま新俳句としたのでは現在の俳句から異議が出ることも必至であろうと思われる。又現在の川柳の立場からいっても、何が故に他のレットルを貼らなければならぬかに異議が多いであろう。川柳の名に於てインフェリオリティコンプレックスを感じるというのであれば潔く、川柳作家の名を返上して俳句でも新俳句でも作らるべきだという意見が出ると思

うが、それを納得させることは容易ではあるまい。あまりに変な呼称は困るが、川柳という名はそう変な呼称であるともいえないから名案の出るまで待つとしては如何なものであろう。考えると、短歌だって俳句だって、素晴らしくいい呼称だとも思えないが、そう思いませんんか。

する白壁に、代官時代をしのばせる。途中、舊代官として名高い井戸平左衛門正剛を祭る井戸神社が、小高い丘上に建てられ未だに土地の人々に慕われている。隆盛を極めた徳川時代には、人口八万を擁し、徳川幕府の財政に益し銀座の根元となった大森町も、廃坑となつては昔の夢。強者共が夢の跡は、丘上に立ち並ぶ、物凄いく数の墓石に感じられる。

江戸の銀座、銀座は、銀座だけが日本一の商店街として栄え、イカス都内の善男、善女で賑わっているが、遠くはなれた石州の国では秋風索寞として、芒の銀色だけが独り旅の僕を淋しく迎えてくれるだけだ。

八万の人口も、今では二千人足らず。それも働き盛りの年令は皆県内、県外の都会に就職を求めて姿を消し、残っているのは、年寄りか、子供。たまに行交う青年の顔は冬枯れの野面のように生気がない。終点の荒物屋の内儀に教えられた路をたどって、やっとKさんの家に着く。米意を述べると、薄暗い奥の方から五十七八才位の丸刈り頭の主人が出て来た。「大田市のTさんに照会していたいたのですが、櫛の丸盆があれば分けて下さい」「それはそれは、遠

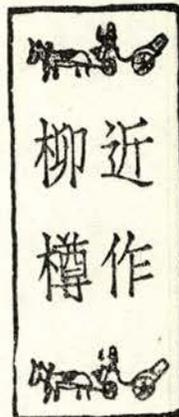
い所をよう来たんかった。まあ上ったんさい」と初対面の僕にもう疑う気合は微塵もない。「さあ上ったんさいや、今日は祭だに、ゆっくりしたんさいや」聞けば今日の用意にご馳走を沢山作つたのだが、米客がなくて困っているとのことである。少しあつかましいようであるが、これも何かの縁と、勝手な理屈をつけて、のこの二座敷に上りこむ。

早速取り出されたお盆が何と、二尺と二尺五寸の超特大のしろも。稀少価値はあるが、持ち帰るのが一苦労である。でも初めてのこともあるので二尺二寸の手頃の分と、思い切って、二尺五寸の大盆を買い求める。商談が終ると料理に添えてお酒が出る。飲む程に、酔う程に、石見の山中の町に身体のあるのも忘れて、因幡弁と石州弁で世間話に花を咲かす。商売の一徳、酒の一徳である。(未完)

川柳雑誌社特製

投句用 柳 箋

一冊(五〇枚綴) 三〇円
送料(一冊分) 二〇円



麻生路郎選

北川春巢選

男みな獣に見えて恋を得ず 新居浜市 小林 孝正

やつれさへ恋のは他人を羨ませ 同

結納へ時計も挙式刻む音 同

産み月と云うに辞令は容赦せず 同

なまじつか出るボーナス気が疲れ 同

世話好きに娘の年を教えられ 倉敷市 水谷 谷水

恐ろしやこんども生徒のタバコの火 同

あぐらかいていまお見合をし とよ 娘 同

停年のポッコな傘も持ち帰り 同

あれからいのケガはクスリになる若さ 同

嘘の世に俺もつんぼを装わん 鳥取県 鈴木村 諷子

人らみな面をかぶってうごめける 同

権謀術策のあやうり人形ども街 ちやうと 同

一坪もようゴマかさず金を出し 同

三日目は夫がじゃまになる 休暇 枚方市 宮川 珠笑

整形医のつもりで女を観察し 同



句評について

直原七面山

紋土一月号のここに佳句ありの欄で難波愁夢氏は、偽せ札がまだ出ぬ県に住む

不運 松本恒夫

の句を佳句の中の佳句として取り上げ、「作者は偽せ札がまだ出ない辺鄙な県に住んでいるのが真の不運と思っているのではない。あれだけの偽造紙幣が流れているのに、何故検査出来ないのかということ皮肉り、当局を糺弾しているのであって、所謂爽快な皮肉句である。」と評している。

私はこの句評を読んで、十人十色とはよく言ったものだ。

「ものも考えようによっては色々にとれるものだ。」としみじみ思うと共に、ただただこの意外さに驚く許りでした。

さて氏はその前書で、「四国の山本芳伸氏が川柳作品の中には、評によって支えられるものと、評に因って倒れるものがあると書いているが、或はそうかも知れない。



酌ぎあつて元の他人で出る屋台	同	十二月忘れて帰る風邪薬	同
借りに来てソファの深さもてかまし	同	効能を笑いTVに負けて買う	同
ワキさへもつれなくなったシテの声 <small>市橋市</small>	古谷まさる	脇役ですんでしまうも倅せか <small>高知市</small>	須藤 俊江
悪声も父母の恵みとあきらめる	同	両親が健在挨拶下手なまま	同
この声じゃ天女も空に昇られず	同	女みな見て頂戴のお正月	同
意識して笑顔を見せる自己嫌悪 <small>松江市</small>	内藤 喜夫	新調の服が彼氏に逢いたがり <small>羽曳野市</small>	古川 静波
絶頂に来て絶頂に立つ不安	同	ガム吐いて黙考してる負将棋	同
お茶漬のうまさ倅せ噛みしめる	同	石切神社初詣	
招かざる客にはテレビつけたまま <small>羽曳野市</small>	小串正太郎	神様のサービス焚火でもてなされ	同
お隣りもテレビ料理か牡蠣を買い	同	幸福に成れとはむごい別れぎわ <small>岡山県</small>	永宗 宗義
二十才を迎えて		弱り目と知ってか邪教のしつよ <small>な</small>	同
スタートだせめてヒゲなど剃って <small>ま</small>	同	失恋の痛手を秘めた玉の輿	同
手術室の音が必死の親を刺す <small>京都市</small>	大久保 和二郎	カクテルにくわしい女みなおされ <small>徳島市</small>	吉田 俊和
この路も久し吾子の癒近し	同	ブレイキがそろそろゆるむ酒に <small>な</small>	同
子の育ち今の孟母に権利金	同	道はばを広げて橋はもとのまま	同
ポーナスをもうろうた翌日から遅刻 <small>尼崎市</small>	大垣たもつ	種袋猫のひたいに夢を蒔き <small>京都市</small>	小黒 王石

然し文芸作品としての川柳は、その本質上、評に因って作品価値が変るものでもあるまい。

即ち作品は、何人がどのように批判しようが、本質に影響なく、厳として存在するもので、ただ読者が、「作者と評者の何れを受け容れるかの問題である。」と卓見を申し述べられているが、この句評では、句は正に、評に因って倒れてしまうのではなからうか。

なる程氏の言われるように、文芸作品としてこの句は、どんなに的外れの句評を故意に試みられようとも、この句の持つ本質になに一つ影響はないであろう。

が然し、だからといって全くの的外れの句評をしてもいいかといえ、決してそうしたことが許されるべきことでもなく、また第

本

福壽司

心斎橋筋大丸前

電話(271)三三四四番



新年をラックスで来るジャズ喫茶 同

人生の幕間新年の餅を焼き 同

そのままをこわしたくない雪景色 松江市 岡崎 祥月

成人式よくも育てた未亡人 同

貧乏クジが当直室で年を越し 笠岡市 松本 忠三

大風呂敷を拡げ新年互礼会 同

電話開通ご近所へ走らされ 大阪市 藤富 淀月

煉炭の生活に過ぎた床の軸 同

組合活動ばかりしていて恋もなし 石川県 南 伝一

養生へ趣味の散歩をせよと云う 同

君が代に頭を垂れて年令が知れ 名古屋市 坂上山椒坊

お元日亡き子の年令を数えさせ 同

初詣速度違反の二人乗り 出雲市 中川 晃男

罪深い手にそり返る飾り 同

君が代が練習曲になり下り 京都市 都倉 求女

一年も積立てたレクで悪酔いし 同

越境入学させて交通事故案じ 仙台市 平野 光道

ストも出来ぬ職に勤めて黒田節 同

老眼鏡兎角世間が丸く見え 高知県 山川 勝子

女高卒半年見ぬ間にお見それし 同

老人の日だが誰アれも来てくれず 伊丹市 小川静観堂

生々庵氏へ

着いた途端夫は妻をいたわりつ 同

愛されてサボテン冬を温く居る 青森県 岩淵 一星

学校をなまけた太い腕で生き 同

祝福の空気が美味しい再起の日 笠岡市 出原 真奇

産婆よぶ有線隣りもとんでくる 同

なせばなる努力地の声天の声 竹原市 山内 静水

もつともなお説お説と断られ 同

尻向けた焚火の背なへ話しかけ 大阪市 山田 蛙水

一、句評が全くの的外れでは、句評を読む前に、その句から受けていた感激や、感銘や、そして共感の多少なりとも悪い影響を受けるのではなからうか。

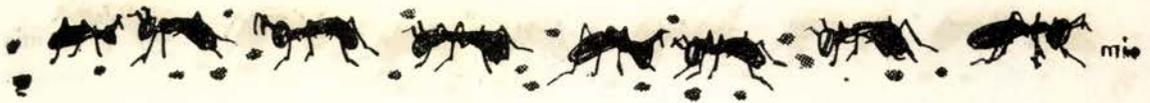
なぜなら、その句評を読むことによって、その句に対する価値判断の基礎が根底からくつがえされてしまうから。

そこで私は、句評が句の、句主の本意にふれ、その点を衝いているのでなければ、評は全くの死文と化して、これはただのたわ言で、全然句評と名付けられるべき価値あるものではないと思う。

例えば、句主は陽は東方より昇ると説いているのに、これを評者が、陽は西より昇るとしたり、本人は猫を描いているのに、この虎は実によく描いていると褒めてみたりしたのは、これは一体どういうことになるのであろうか。

評者の常識や良識を疑われるばかりではなく、句主に取っては、句評されたことが、かえって有難迷惑の上もないこととなるのではなからうか。

さて、前掲の恒夫氏の句を読まれた人々は、恐らく十人が十人も、百人が百人とも、私は偽せ札と報償金と、そして偽せ札がめったには廻ってきそうにもない辺鄙な田舎のことに思いを馳せ、そし



ポーナスのプランストープ聞 <small>きこ</small> いて	同	書初に禁酒をそれ程酒が好き <small>玉野市</small>	小谷 仙山
依頼免職実汚職へ名を連ね <small>津市</small>	嶋野ひ呂し	思う様にならぬ浮世だ株を買う	同
気休めの言葉を笑うカルテの字	同	京の町邪恋の後のほたん雪 <small>豊中市</small>	三木 柄林
一人娘を嫁がせ内職せいを出し <small>兵庫県</small>	齊藤たけお	ポーナスがスピード違反 <small>マッ</small> 飛んだ	同
新築のうれしさに二階へまた上 <small>り</small>	同	まだ上る欲が売らない 三坪半 <small>金沢市</small>	河合 卯翁
裏ばなし佳境へはいる茶をよばれ <small>大阪市</small>	坂井さち子	死んでも死んでも登り度い冬の山	同
酒がついめはずさせた裏ばなし	同	帯しめる所詮母の手借る昭和 <small>兵庫県</small>	常岡 孝風
寒行も世のいとなみよ星は澄み <small>広島県</small>	中島まいと	プレゼント忘れず靴忘れて来	同
気に入る患者ストープへ残しとき	同	子を怒ること貧乏へつきまとい <small>今治市</small>	越智 一水
大安を選ぶ老眼安らいで <small>大阪市</small>	和田 旋鳳	四国路の春道標に教えられ	同
さよならをも一度云って見切り <small>は</small>	同	留守番はヨガの真似して時稼 <small>ぎ</small> <small>岡山市</small>	行吉 照路
一一〇番かけてもふるいまだや <small>ま</small> <small>新橋浜市</small>	安藤 桂仙	失言と云って女にさぐり入れ	同
悠々と乞食が犬の二頭だけ	同	数の子を子に見せていく市場籠 <small>大阪市</small>	福富 隆子
山の子は燕一羽をけなるがり <small>福島県</small>	住吉 貞坊	寝て食って <small>テレビ</small> を見てるに早七日	同
年上の嫁もろてから運がつき	同	働くが趣味とか趣味の無い暮し <small>今治市</small>	八塚三五島

て句主もその点を衝き、選者もまたその面の面白さを買ってこの句に川柳句としての価値を見出し、佳句として入選句としたのではなからうか。

これが愁夢氏の言われるように、偽造紙幣の検査であったり、当局の不始末の糺弾であったりしたのでは、思い過しも甚だしく、全く東を西と言いくるめる仕儀であって、猫虎主義の真只中だと言う外はありません。

なぜなら、検査や糺弾を衝くのなら、まだまだ他に、それにふさ

スマートで
着心地良い



GOLDEN
O.S.K.の
紳士服

各地特約店に有り



にせ札の記事のんびりと読む暮し	笠岡市	佐内 隆文	股火鉢した受付があごで聞き	玉島市	井上 旭峯
薬湯につかり 勤労感謝の日	川崎市	赤池 五朗	ナチュラルとお化粧をせぬ顔をほめ	西宮市	鶴飼 鮎子
急がしき子に恵まれる年の暮	大阪市	吉田 季生	まかぬ種生えぬと知つてまより待ち	大阪市	宮尾あいき
盃は野心とつくに見抜いて居	出雲市	森山健太郎	赤シャツを着れば情熱ある如し	宮崎市	野口卯之助
御仏の論し聞くよな徐夜の鐘	和泉市	末田 晃康	親の恩知らず他人の恩を知り	愛媛県	村上 竹生
二人の母になって古疵さわりに来	河内長野市	森本黒天子	大言壮語どこかで女房の眼	羽咋市	北山耕人庵
帰郷するナースをすぐに目出度 <small>ども</small>	神戸市	吉田 隆史	経営の金科玉条菜っ葉服	玉島市	水粉 千翁
年を越す借金の前でそばすすり	西宮市	沖吉 照児	へそくりを舌で出させる証券屋	大阪市	田中 青都
有線がかしわかたそにアナウンス	笠岡市	谷本鈍愚坊	恥をかく度に世間を勉強し	姫路市	隠岐 不酔
お土産をまとめて値切る大阪弁	羽島野市	岡本紀太郎	物価高お年玉にも影響し	豊中市	稲増 久雄
新婚は経済棚 上げして別居	茨木市	高木繁太郎	押す人は出ず出たいのは押しも <small>き</small>	愛媛県	村上 石峰
免許証妻が持つてる 自家用車	見島市	伊丹柳瓢子	成人になって昇級するでなし	岡山県	久戸瀬春光
なに一つ足しにもなれぬ大晦日	遠野市	鈴木 二文	自信あるハンド片手に気をも <small>も</small>	羽島野市	大谷 楯雄
置こたつ又マージャンに占領され	金沢市	根上 杏花	御年始に娘の縁談申しそえ	京都府	西村句楽坊
和服ばかりで参賀のテレビジョン	岡山県	藤原 秋月	模擬試験教官だけが退屈し	羽咋市	三宅 ろ亭

わしい適当な表現方法がいくらでもあるのだから。

そこで、もしも評者が、自己の勉強不足や認識不足、あるいはまた、自意識過剰の結果などから句の本意を曲げて的外れの句評などしたとしたら、これは句主並に読者に対して誠に相済みぬことで、評者はいさぎよく平身低頭、辞をひくくして陳謝すべきであらう。

従って私達は、人様の作品について、少くとも選をさせて頂いたり、句評などさせて頂く場合は、自己の力量というものを正しく評価し、決してその時の思いつきや、御都合主義によって選をした句評したりすることのないように、十分の上にも十分注意して行動すべきだと思います。

でないと、選者や評者の行為がことによれば句主を、読者を侮辱するような結果になり兼ねない場合も生じるから。

こうした意味からも、私は常々、分に過ぎた責任や身に余る荷物を背負い込んでいるのではなからうかと自戒に自戒を重ねているのですが……。果たしてどうであらうか。



松下禪尼

富士野鞍馬

松下禪尼は、秋田城の介安達景盛の娘で、鎌倉幕府の執権、四代、北条時氏の妻、時頼の母である。時氏の死後剃髪して、松下禪尼と称えた。

「徒然草」第百八十四段に、「相模の守時頼の母は、松下の禪尼とぞ申しける。守を入れ申さることありけるに、すすけたる明り障子のやぶればかりを、禪尼手づから、小刀して切り廻しつつ張られければ、兄の城の介義景、その日の経営して候ひけるが、「賜りて某男に張らせ候はむ、さやうの事に心得たるものに候ふ」と申されければ「その男、尼が細工によもまさり侍らじ」とて、なほ一問づつ張られるを、義景「みなを張りかへ候はむは、はるかにたやすく候ふべし、まばらに候ふも見く

ている。

月のもる障子あかるき御教訓

(タル七九)

せうじより大事を尼の御教訓

(〃二二八)

花も実もある切り張りの御教訓

(〃七二)

切張は大事をしやうじより教へ

(〃四〇)

大事の障子よりおこる御教訓

(〃九二)

きつとした意見は障子の切り張

(〃三二)

風よりもしみる障子の御教訓

(〃五五)

切張は風よりしみる御教訓

(タル五六)

障子の教訓横紙は破られじ

(〃九一)

とよい教訓として詠まれ、

「月のもる」は「鎌倉の星月夜」を利かせた趣向である。

切り張に禪尼天下の炬をとき

(タル四五)

和らかに解いた禪尼の刷毛序

(〃二二六)

切張の跡で異見の刷毛序

(〃八三)

と障子張に用いる糊と刷毛

に利かせても作られ、

きりはりで国家へ穴をあけさせ

ず

(〃五七)

と大きくも詠まれていた。

和漢のいけん切張と機をきり

(タル三七)

松下禪尼は、障子の切り張

りで儉約の尊ぶべきを教え

たが、昔、中国の孟子の母

は、学業の途中で帰って来た

孟子に、今まで織っていた機

(はた)の布を切って見せ

て、途中で学業をやめたら、

これまでの骨折は無駄になる

と教訓した。この二つの母の

教えが「和漢のいけん」であ

る。

九代目は破れ障子にしてしま

い

(タル九九)

この松下禪尼の教訓も、九

代目高時の時には守られず、

田楽舞や愛犬にこって、つい

に北条氏は亡びた。

九代目は田楽を好きみそをつ

け

(タル三六)

禪尼の子時頼は、十九才で

五代執権となり、その教えを

遵守して善政を施いた。最明

寺入道としても、数々の物語

りが伝えられている。「徒然

草」には、時頼が、生味噌を

なめて酒盛りしたことが書か

れ、それも川柳に多く詠まれ

てある。

味噌をなめなめ時頼も数献也

(タル三九)

焼飯の世は生味噌で酒を飲み

(タル九九)

四方へ行届くは味噌の御教訓

(〃一〇八)

焼味噌で呑んでも銘は三ツ鱈

(〃一四二)

「焼飯」は三角だから、北条

氏の紋「三ツ鱈」を利かせ、

「四方」は、江戸和泉町の有

名な「四方の赤味噌」に利か

せている。

これも質素儉約の話である。

ザの地
エツ心
タッそ

フエザ
ー剃刀

FEATHER
SAFETY RAZOR
BLADES

Safety Razor
Blade

踏み切る (上)



川村好郎

— 本社二月句会
の柳話から —

昭和三十八年を迎えて早や二月、それぞれ今年こそはと一年の計を立ててきた。私も今年は還暦を迎え、六十は六十なりに、非力は非力なりに、こうもしたい、あもしたいと抱負もあり希望を持って進んできたのである。しかし、為し遂げたいと思うこと、せねばならぬと思うことは足踏みをさせ、躊躇させるものがあった、折角我れながら感心をするようなプランを踏み切つて行動に実行させることが出来ないのである。

一年の計こたつた中で考えるに終つてしまふようである。今年こそ川柳塔に毎月投句しよう。本社句会に全出席しよう、決心しながら実行出来ないのもその一つである。固より意志薄弱がそうさせるのだと思うが、その中味に踏切らせないものがあることがわかり、それが大体三つあることがわかった。

その一つは自分の現在の増進、才能等が遂行するに適せず、その

資格がないという自覚によることである。今少し金があればこれも出来よう。もっと手腕があればやれるのだが、環境が許さない。忙し過ぎるからだとか、そういうことが障害になって踏み止ませるのである。どうにも成らぬものだらうか。

私が東京に居た時、路郎先生の許しを得て、故福田山雨楼、宮田不二氏等と共に川柳東京支部を創めた時、会員に根岸東夢君が居った。私と同じ会社に東京出張所々員として勤務していて私は彼に川柳を教えた。よく働く男で川柳の上達も早かった。将来を嘱望されていたが残念にも三十五六で病死した。今もし彼が居たら川柳東京支部も中絶せずに続けられていたことと思うのである。彼は非常に愛妻家であつて、うらやましい程夫婦仲が良かった。彼は夫婦というものは唯妻を可愛がつても、親切であつても、どんな欲し

いものを買つて貰つても、決してそれで夫婦仲がうまくいくものではない。問題はセックスである。夫婦間のセックスがうまくいっているか否かが第一条件である。というのが彼の持論であつた。当時私が大阪を離れて年の大半は東京暮らしであつたのを心配して、近作柳樽へ、好郎氏へ、という前書をして

家庭とは月に三日住みとこらと投句して私に抗議したことがあつた。

彼の家はせまく、母親が健在で同居していた。年寄りの常で若夫婦に対する嫉妬心も強く、耳もよく聞えた。隣りの狭い部屋には二人の子供を中にして夫婦は両端に床を敷いて寝るのが毎夜である。ここに夫婦の交りに困つたのである。しかし彼は持論上からも、この儘で捨てておけない。そこでこの不自由の中に種々工夫をした。

先ず夫である彼は寝ている上蒲団へ手を差出して蒲団の襟をポンと叩くのである。すると家内は自分の蒲団を同じようにポンと叩く。つまりOKである。すると実行の心構えになって、どちらかが二つの子供の山を越えて、出張するのである。或る時はポンと叩いても遂に応答はなく、むなしく引下がるのである。或る時はポンと叩いても応答なく、念のため更

がない。今日も駄目かと思うていると、ややあつて力弱くポンと小さい音がする。そうかと思うと、ポンと叩くや否や、待つてましたとばかり間髪を入れずポンポンと叩く。

彼はこのことを話して自由にやれる時よりも不自由さの中の方がユーモアがあり、愛情もあり、夫婦の愛情の深まることを知つたという。こんなことのために若死したのかも知れん。

妙な例を挙げたが、無ければ無いで、不自由な環境ならその中で工夫し、練り出すことによつて、不十分なながらも我がプランを実行に踏み切ることが出来るのである。

第二は思考しプランを立てただけでその結果を危憂し、不可能とみてかかることによつて折角の善行為を躊躇するのである。もっと誠意を以て働こう。もっとあの人に親切で接しようと思うが、その結果もしや裏切られはしないだらうかと足踏みする類である。

第三は余りに一時に多くのせねばならんことが多過ぎるためその一つを選ぶのに迷ひ、他の事がらを犠牲にせねばならんことを考えて足踏みさせるのである。

今晩皆さんと共にこの句会に出席しているが、句会に出席することを第一の実行と選び、寒さを振り切り、面白いテレビを犠牲に

し、誰かとデートすることも捨てて出席された方もあるでしょう。そして作句して投句しても天になるやら全没になるやらそんな結果を考えずに川柳第一主義に今晩はプランを踏切られたのであつて、川柳の良き、たのしさを味わうことが出来たのである。

以上私はこの三つのが邪魔をし、二つ、又はこの三つがもつれ合つて我人共に敬愛すべき抱負希望を實踐させないものである。茲に私の小さい体験を聞いて頂こうと思うのである。

私は五年前から毎朝天王寺にある金光教の教会へ参つて



いちじるしい霊験めあてに参つてゐるわけでもなく、単なる精神修養のつもりで参つてゐるのでもない。親からの私の家の宗教であつて、生活の基調として、人生のよりどころとして教も聴いているのである。こんな話をしたからといって、我が信する道をPRしたり

皆様を折伏するのでなく一体験として申上げるので安心して聞いて頂きたい。

毎朝六時に祈念講話があるの
で、一日の最初にと思つて高師ノ
浜駅初発に電車に乗って教会へ六
時二十分頃に着くのである。よく
この電車で月の初めに中島生々庵
氏に逢う。生々庵氏も何処かへ月
の初めに詣られていらしい。六
時二十分に着くともはや教会では
講話も始つてゐる。六時に着きた
いのだが高師ノ浜初発が五時三十
五分でこれ以上どうにもならな
い。それで約六年間この儘で通し
てきていたのである。しかしどう
してもそれより早く家を出られぬ
かというて決してそうではない。

高師の浜駅の初発は五時三十五分
であるが本線の高石町駅から乗れ
ば五時十四分が初発であり、これ
に乗ると天下茶屋の連絡もよく六
時五分前に教会に着くことが出事
るのである。そうわかつておつて
何故それに乗らないのか、ここに
実行をさまたげる第一の難点があ
る。

高師の浜より高石町駅の方が私
の家より約徒歩で十分程遠い。現
在より約三十分早く起きねばなら
ない。教会から帰りに会社へ出勤
するので家内は私より早く起きて
朝食の用意をしなければならな
い。それは可哀そうである。自分
は喜んで参拝するからといって、

そのまま家族の者に押しつけると
いうことは間違つてゐる。寝てお
れといつても後で寝ることも起きて
くれる。更に高石町駅から往きに
乗るとなると定期をもう一枚買わ
ねばならない。もしそんな早く
起きて昼会社で居眠りが出ては何
にもならないという第二の難点、
結果を危惧するのである。これが
為に実行しようと思いつつ今日
まで踏み切つていないのであ
る。

元旦を迎え、よし今年はずまずこ
れを踏み切らうと考へた。いや遠
いの、女房が可哀想だの、定期を
買わねばならぬの、昼疲れたらな
どといつてゐるが結局それは実行
すまいとする自分に対する言いわ
けであつて、ほんとうはもっと眠
つていたい、早く起きるのがつら
いというこの事なのだといわかつ
た。そこで一月二日から敢然実行
に着手した。そして今日までつづ
けてゐるのである。さて実行して
みると眠むいの寒いのといふこと
は余り苦にならない。ただ床を離
れる瞬間だけである。どうしよう
かと考へたり、昨夜おそくなつて
いるからとか、寝不足したら何に
もならない。朝詣りだけが信仰で
ないなんか考へていたら蒲団を蹴
つて起きることが出来ない。過去
も未来も考へずとにかく飛び起き
ることである。後は実行するまで
に想像し、杞憂してゐたことが、や

つてみればそれ程苦痛でもなく、
案外業にむしろ勇気が出てやれる
といふことである。床の中で寒風
を聞いてゐる方が余程寒い。
一月中旬の北陸の猛吹雪の日、
あの日は寒かった。私の家のよう
な安普請の雨戸は眠れぬ程ガタガ
タ音を立てるし、雪が降るし、吹
雪のために停電はするし朝から
真暗闇である、家内が私の枕元
で、
「今朝はどうします、えらい風や
し、雪は降るし、その上停電で道
は歩けません、今朝は行けませ
ん。どうします。」
と言われた。どうしますには参
つた。そんならやめようかと思ひ
かけた。しかしここだと蒲団を蹴
つた。この時は実行する前に想像
してゐた以上の雪降りであり、寒
さであつたが決行することによつ
て何の支障もなく、むしろその難
点を突破出来た自分がうれしかつ
た。

続
川柳書架
(28)

川柳大辞典 上巻
大曲駒村編著
梅本塵山校閲

★本書の巻頭には、麻生磯次、エ

ル・エッチ・ブライス、本間久
雄、岡田三面子、笹川臨風諸氏の
序がある。
★次いで編著者の「凡例」掲げら
れてある。その一部を抜萃するこ
ととする。
一、本書は難解なる川柳術語を初
め、川柳に慣用された俗語、造
語、擬人名語、文句取語、及び川
柳独特の解釈を有する特殊語等を
網羅する外、地名、人名の如き
も、必要と認める限り努めてこれ
を挙げた。
(中略)
一、引用の例句は、総て明治以前
のもののみを選んだ。それも川柳
を主とした事は勿論であるが。必
要上所謂狂句の混入も免がれなかつ
た。数は総て五句以内に限定し
た。これは、徒らに川柳の大分類
集化するを避けるためであつた。
(以下略)

急特近鉄
ステキな特急
2階電車

大阪—名古屋
ノンストップ
2時間18分

大阪上本町から	名古屋ゆき... 20往復
	伊勢ゆき... 9往復
名古屋から	大阪ゆき... 20往復
	伊勢ゆき... 10往復
伊勢から	大阪ゆき... 9往復
	名古屋ゆき... 10往復

オール座席指定・特急券は乗車の14日前から
近畿日本ツリスト・日本交通公社全国各
業務で発売 (近鉄上本町
名古屋・宇治山田と特急
停車駅は5日前から発売)

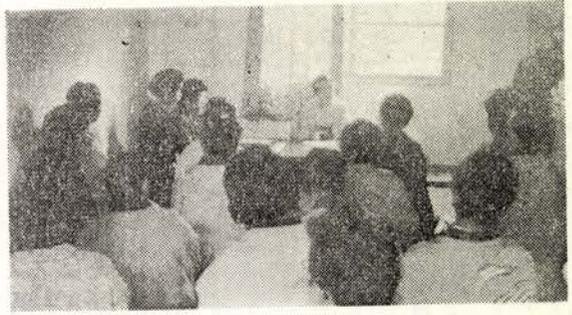
近畿日本
鉄道

昭和十四年三月 編者識
★本書は五十音順に配列され、上
巻は「あ」—
「そ」までが掲
載されている。
★昭和三十年八
月一日発行。四
六版、九六二ペ
ージ。上巻定価
一、二〇〇円。
発行所、東京都
千代田区神田小
川町二の六、日
文社。

川柳大辞典 下巻
大曲駒村編著
梅本塵山校閲

★本書は五十音順の「た」—
「を」まで掲載されている。
★本書は編著者が多年の労苦をい
とわず、編纂されたものだけに、
巻末には「補正」のページ、なら
びに「川柳大辞典正誤表」を掲げ
る等、全く良心的な出版であ
る。

★昭和三十年八月一日発行、下巻
定価一、二〇〇円。四六版九三〇
ページ。発行所、東京都千代田区
神田小川町二の六、日文社。
★従来、川柳辞典は他にも出版さ
れてゐるが現在に於て本書が最も
權威のある川柳語の辞典であるこ
とは何人も異論のないところであ
らう。



川雑婦人友の会で講演する麻生霞乃女士

川雑婦人友の会

のつごい

— 会場 中島小児科診療院楼上 —

く、次に披露に移り笑いが湧いたり感嘆の吐息が洩れたり。第一巻、終。

テーブルに御馳走の数々が並び、吉野がちらし酢を黒塗りの手桶のようなお器に入れて来る。霞乃先生蓋をとって「二重かと思ったら一重や。」すると小石さんが「阿茶さんが値切りはったさかい」

一栄さん「会費少ないのにいろいろとお気の毒でんな」「お菓子は貰い物、お酒とビールは生々庵のうわ前を一寸はねただけ」と小石さん、「ほんなら吸物は小石さんのへそくりのうわ前でっか」と清子さん、「吸物が咽喉につまる、つまると阿茶。」

一月二十日寒い日曜日だったが年に一回の集りというのでお事多い一月、ことに主婦の座にあって日々御多忙の方々が沢山顔を見せて下さってなかなかの盛会であった。霞乃先生を初め、小石、阿茶、一栄、清子、良子、操子、きさ子、みち子、春栄、美喜、みさ子、美津子、あいき、とよ子、みね子、政子、しげる、メ女の十九名。

清子さんの名司会で初めより理事長の挨拶、投句をサボラヌようとのお願い。霞乃先生からは「個性を生かせ」というお話を承り、昨年度全投句者の、阿茶、きさ子、一栄、清子、勝子、周甫の六名に賞として霞乃先生の短冊を頂

に一人ずつ、カステラ、最中、栗おこし、おかき、チョコレート、飴とお稻荷さんのお下りのように盛ってくださった。これが気になつてと持ち歩いてるのはきさ子さん。

今回初めて来てくださった方が六人もあり、古顔新顔も皆十年の知己のよう。川柳ってありがたい。

◎ 宴半ばに小石さんの露払い舞踊「老松」があり、霞乃先生の「わしが思い」「葉桜」と達者なところを見せてくださり、きさ子さんの「オーイ船方さん」みち子さんの「おてもやん」メ女さんの「よさこい」とよ子さんの「鶴亀」と芸達者揃い、和気あいあいのうち米年を堅く約し午後七時散会。

◎ 兼題「あこがれ」麻生霞乃選
あこがれは一生胸の中で燃え

きさ子
あこがれは一生胸の中で燃え
少女趣味星にあこがれ花にあこがれ
阿茶

ライトあびステージに立つ夢をみる
あこがれの母伴うて二重橋
操子
憧れの都へ胸をふくらまし

とよ子
あこがれを捨てて家業を継ぐ不幸
春栄
あこがれの夢さめぬまますねかじり
一栄

良子
おくれ
あこがれた大尉が保険すすめ
しげ子
あこがれを赤いネオンがとりこ

春栄
あこがれは空の彼方の君のもと
美都子
あこがれの角帽母の眼がうるみ

小石
あこがれの師匠と合わす舞扇
美喜
返り咲きを囲んでくれる弟子があり

きさ子
夢ですのとあこがれそつとしまつとき
阿茶
老境の童謡聞いて目をほそめ

みさ子
あこがれのスターも今は老婆役
美都子
末っ子の憧れ空のパイロット

とよ子
あこがれは架空の人で万事無事

地
良子

人

現代柳人録

- (一) 姓名 (二) 雅号 (三) 別号
- (四) 現住所 (五) 生年月日 (六) 出生地 (七) 職業 (八) 電話 (九) 自信の句一句 (一〇) 川柳以外の趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二) 川柳に手を染めた年月

(176) 服部十九平

- (一) 服部勇 (二) 十九平 (三) 服部勇
- (四) 岡山市原尾島六四〇
- (五) 明治34年6月18日 (六) 岡山県久米郡久米南町塩之内 (七) 団体職員 (八) ③二五二八 (九) ひき蛙蹴られたことが腑に落ちず
- (一〇) 囲碁 (一一) 有 (一二) 青年時代、本格的には終戦直後

(177) 野口卯之助

- (一) 野口卯之助 (二) 卯之助 (三) 野口卯之助
- (四) 宮崎市東雲町二ノ一九
- (五) 大正4年9月10日 (六) 高知市東片町 (七) 建具製作 (八) 相手を打てば神様こちら向き (九) 映画、姓名学、手相 (一〇) 有 (一一) 昭和十四年十一月

(178) 菅生蒼樹

- (一) 菅生圭吾 (二) 蒼樹 (三) 菅生圭吾
- (四) 盛岡市向中野字下久保



入門講座

研究題 「舌」

清水白柳

生活を素材として自己の生活体験から生れた作品は人の心を打つものであるがその作品は作られた句でなく、生れた句でなければ人の心を打たないということが出来ると思う。生活を素材にして書いた句ではいけないのである。作者の感情がそこに、こもっていないければ、人を感動させることが出来ない。作者の感情が人に伝わることによって、その句の面白さが、わかるのだから、句の表現には殊に苦心してほしいものである。今月の研究題は面白い句が多かったので張り切って書かして頂くことにする。

女三人饒舌だあと恐れ入

女三人輪転機ほどはずむ舌

よく廻る舌です今日も立ち

前の句は恐れ入りという報告めいた語によって句を弱くしてしまっている。この下五文字を推敲することによってまだまだいい句に

なる筈である。次の句は輪転機ほどという比喩が生きていてそのほほえましいまでのすさまじさを現しているのが良いと思った。後の句は今日も立ち語と今日もに重点があるのだが着想がやや平凡すぎた感じであるのは惜しい。

- 1 愛情の乳房へ力強い舌 H
- 2 乳首吸う舌の力にはげまされ H
- 3 乳豆吸うこの舌末がどないなる S
- 4 パパイ手を慈母は恵顔でなめて S
- 5 孫を背に舌の運動に出掛けたり S

1の句の愛情の乳房へという語は冗漫であると思うし、力強い舌という語も力を持っていないので報告めいた句になっている。2の句は下五文字のはげまされという語によって句意がぐんと深くなっているのが良いと思えたのである。3の句の末がどないなるという句意は面白いのだが表現が少しおどけすぎたような感じがして

句品を傷つけているように思うので何か別の句語を考えられると良い句になるのではないかと考えた。4の句は無駄な文字を使っているの句がだれていて、それは慈母という語である。パパイ手を笑顔でなめてやるのは母だと定まっていなければならないと思う。パパイ手をなめる笑顔へこすりつけ、とでもするか或は、抱き上げて笑顔でなめるパパイお手、とでもしたらと思う。5の句は面白いと思った。舌の運動という語がこの句の焦点になっていて、句意を浮彫りにしているのが感じられた。

- 神のごと舌で銘酒をあてて K
- 酒の味紋見分けてる舌の先 H
- 特級酒やっぱり違う舌ざわり K
- 利酒の予選は目から鼻にさせ S
- 利酒は鼻に前座をつとめさせ S

どの句も事実の報告でしかないと言えるのではないだろうか、神のごとと言う誇張もよいがこの句の場合はそれが生きていないようである。作者が神のごとと感じたのであろうがそれは作者だけが感じたのでそれを人に伝える感動が出ていないのである。酒の味、紋見分けてるといいう句の見分けるといふことにこだわったわけではないが少し違うように感じられたのである。もっと適当な言葉があるのではないかと思った。特級酒の

句は、そのことずばりをそのまま句に並べただけで句としては平凡である。やっぱりと作者が感じを出してはいるが、それだけに終ってしまった句になっている。利酒の句の予選は目から鼻にさせは理屈はその通りだが、その理屈が余りにも出すぎている句に余情があわす迄に目で色を見、鼻で香りを感じさせる。その道程を描いたのだがそれだけでは句として頂けない。その点鼻に前座をつとめさせという句の方が面白いと思う。それはその道程を説明しないので前座という具体的なものによってその道程を表わされているからであると思う。

- 巻舌の啖呵に寄席のリバイバル H
- 尻屈屈をまた巻舌で押す輩 S
- 巻舌の啖呵の句は面白い着想であるが寄席のリバイバルという下五文字が惜しいと思った。言い切ってしまったような句になったのも下五文字のせいであろう。尻屈の句も着想はよいのだが句全体が理屈っぽく感じられるのが惜しい。それは下五文字の押す輩が説明になっているからだと思う。押す輩をむし返しとでもするとどうだろうか。

舌鼓打って無作法と叱られる K

舌鼓故里の父母から彼岸餅 R

久しぶり故郷の味舌に浸み

夕餉をはめてやりの句は平淡である。余りにもそのままの事柄なので、だれでもが感じる事柄は、だれでもが一度は作句するので、共感を呼ぶことが出来ないのがある。無作法と叱られるという句は良いと思う。この叱られた事によってその家風とかしつけとかいうものまでが想起されるからである。彼岸餅の句には作者が舌鼓を打って喜んだ感情が出ていない。それは故里の父母から彼岸餅が届いたという報告だけに過ぎないからである。この事柄を素材にして句を練ってほしいと思ったのである。久しぶりの句も平淡であるが、舌に浸みとやや感情が表わされているのが取柄である。

- 1 味わうも喋るも舌の重宝さ S
- 2 また寄った舌が素通りさせぬ味 S
- 3 暗闇も舌の味覚はうばわれず S
- 4 舌ざわりも言うて試食の点をつけ S
- 5 舌の根の乾かぬうちに飲みはじめ S

1の句は舌の機能を十七文字使って説明しているの、これは作者不在の句といえるのではないだろうか、人間の舌といえるのはこんなものだといっただけでは句にならないと思う。2の句は上五文字に弱点があるように感じた。それは素通りさせぬという語があるのだからまた寄ったという語は蛇足のように感じられるからである。3の句は少し理屈っぽい

杏花

句である。その理屈っぽさは下五文字にあると思う。うばわれずと言ったために句全体が理屈になつたのでこうした場合うばわれなかつた事柄を描き出すように苦心してはしいものである。4の句は佳句である。そのせん細な感情が人の共感を呼び起してくれて微笑を言ってくれるのもたのしい。5の句は面白い句である。うがち味を持っているので上出来と言えらると思う。

- 1 胃を痛め舌三寸が泣き所 K
- 2 舌出して診せてのみ過ぎと K
きめられる K
- 3 脈と舌だけで診察すんじま S
い S
- 4 診察室舌を出したらハイよ 八郎
ろし 八郎
- 5 入歯して舌はまま子の如く S
あり S
- 6 歯医者さんにけずらしたと 弘村
舌がつげ 弘村
- 7 うそでない舌はお医者に見 柳瓢子
せる舌 柳瓢子
- 8 舌出して舌を出させる小児 初甫
科医 初甫

1の句の舌三寸が泣き所という泣き所が句意をあいまいにしていふと思う。別の句語を考えられる方がよいのではないだろうか。2の句は面白いのだが何か少し物足りないものがあるようで惜しい。3の句は脈と舌だけで診察がすんでしまった呆っけなさを詠んでいるのだが説明調になっている。その点4の句はハイよろしと言われた患者の物足りないような気持が

そのまま感じられて共感の持てる句になっている。5の句は「まま子の如く」という比喩が適切でないで感じは判るのだが良いとは言えないと思う。6の句はうまく表現されているので佳句になった。歯医者さんにけずらしたと患者の立場にした方が句が面白くなると思うがどうだろうか。7の句は佳句と思う。着想もよく表現もびったりしている。難の無い句である。小児科医の句も佳句である。舌出して舌を出させるという仕立て方には敬服した句である。小児科医では敬服しなければならぬところにも佳さが見られる。

釘抜きでぬいてやりたいに K
くい舌 K
嘘言えは舌ぬく鬼が来ると K
子へ K
閻魔の話そんなの嘘と現代 K
子 K
釘抜きの句はよい着想なのだがにくい舌が惜しくも点に入らなかつた。にくい舌と説明せずにくいそのことを句語に表わしたかつたと思う。題にこだわった感じがたのである。舌抜く鬼の句も何かものたりない感じがする。子へという結びも句のバランスを崩したようである。現代子の句もその通りなのだがその通りだけでは句に深味がないといえると思ふ。

封をする舌がこそばゆいラ Y
ブレター Y
切手はる舌に一生御厄介 S

祈る気の舌で履歴書出す切手 和三郎

ラブレターの封をする舌がこそばゆいとは良い着想だと思うのだが、こそばゆいという気持に共感を呼ばないものがあるように感じられたのは惜しい。切手をなめるのに舌に一生御厄介になるという誇張も悪くないのだが、それだけに祈る気のもので句に厚味がない。祈る気のもので句にはしみみとしたものを感じさせられた。表現方法もよいと思った。切手をはるとか、封をなめるとかいった無駄な文字がないからだろうと思う。

舌一枚しか持てぬ男で出世 八郎
せず 八郎
年の瀬は第二の舌が越して 貞坊
呉れ 貞坊
二枚舌を題材にした句である。前の句は嘘の言えない男を自嘲した句で深味を持っている。年の瀬の句は何とか言い逃れたという古い着想であるが第二の舌という二枚舌の二枚目の方を描いたのがどうやら及第点だがそれだけの事を持って廻って面白がっているとはいえないと思つた。

口八丁手八丁という言葉がある 辰始
がこの句は手八丁だけで口の方は駄目だという句意であるが、無口な舌にやや弱点がある。それは舌

という字がダブっているように思われるからであろう。

初めは処女の如く終は脱兎の如き舌 秋月
表現は面白いが深味のない句になつている。
よう舌もかまずにあれ程ま 雄水
くし立て 雄水
舌を咬むようなソングに人 楓林
氣沸き 楓林
せがまれて早口詞に舌を噛 辰始
み 辰始
舌をかむような地名はかな 静水
を付け 静水

それぞれ面白さを持っている。まくし立ての句はその情景をうまく現わしている。ソングの句は下五文字の人氣沸きを「沸く人氣」とした方がよいように思う。早口詞はよく焦点をキヤッチしている。地名の句の舌をかむようなという文字がよく生きている句である。

片言で言う毒舌の孫をほめ B
毒舌を吐いて後悔臍を噛み S
毒舌へただよう空氣殺氣立 S
ち 柳瓢子
毒舌がボンボンと若さ 真奇
なり 真奇

う句は弱いと思う。それはその殺氣立っている情状が想像されないからだろうと思つた。ボンボンという句はその毒舌を吐いている若さをボンボンと畳みこんだ手法で生かしている表現がよかつたと思ふ。

毒舌に慣れた議員は子守歌 T
奥の手の舌使い分け当選す K
自宅では無口議會で喋る舌 S
舌戦中頭の低い議員さん F
一票につらなる美酒と知らぬ舌 生薑
毒舌を子守歌のように居眠りする議員さんを詠んだのだが子守歌では適確な表現とは言えないと思う。奥の手の句は舌使い分けという句語に作者は自信を持っておられると思うのだがその自信ほど共感を呼ばないのは議員さんの二枚舌ということももうありふれた諷刺でしかないからである。自宅ではの句はこの反対の場合もあるだろうと思われるし、この句の通り人もあるがそれは決定的なものとは言えないようである。頭の低いという句は漫画などに描きつつされていて句にとりあげるには底が浅いと思えるのである。一票の句は、そしらぬ顔で痛いところをついている風刺のこもつた句であると思ふ。

主を讚美する熱弁へ涙する I
も一つ突込み方が足らない。下五文字の涙するも何かそらそらし

主を讚美する熱弁へ涙する I

い感じがする句である。

証人の舌へ被告の腫がすわ
り Y

証人がよばれ被告の舌もつ
れ 隆史

証人の舌へというのは題にこた
わった感じがある、証人の言へ
ということなのであろう。被告の舌
のもつればこれでもいいと思われ
た。

舌たらずでしたとうまい御
答弁 K

舌たらず誤解まねいたとも
知らず 一鶴

御答弁という句語はいけないと
思う、何か不真面目な感じを人に
与えるようで頂けない。次の句の
誤解をまねいたのは舌たらずのた
めであるという句意なのだと思
うがもう一つ舌足らずが生きてい
ないようにある。

代弁は社長の言わないこと
も添え 八九寸

取立てて言うところのない句で
ある。

はじめて鼠捕った仔猫へ舌
なめずり S

イカモノに見立てて料る牛
の舌 H

手鏡で舌を見てたら獣のよ
う K

こんやくで撫でられたよ
う犬の舌 ひ呂し

まだほしい子猫は皿をなめ
まわし 静水

ねずみを捕ったという句は素材
のまま放り出した感じの句であ
る。牛の舌の句はイカモノに見立
てるというのとは変ではないかと思

った。或はそうした料理の仕方
があるのかも知れないが残念ながら
私は知らない。手鏡で自分の舌を
見ていただけでも感じたという
句意は非常に良いのだが表現がぎ
こちないと思う。表現を考える
いい句になる筈である。犬の舌は
実感が出てくる。面白いと思っ
た。子猫が皿をなめる情景はよく
見ることである。この句は、まだ
ほしいと子猫の気持ちを代弁したの
がよかつたのであろう。

舌先きで母を丸める術を持
ち K

後味の悪るさ舌三寸で母だ
まし K

どちらの句も着想も古く表現に
も人をひきつける何物も持ってい
ないと言える。

酒の上でしたですまぬ舌と
なり H

酒の上でしたて済まぬ仕儀とな
りという古句がある。舌となりで
は古句よりも良いとは言えないよ
うである。

失敗の度に舌出すくせがつ
き K

失敗ってペロリ出す舌皆乙
女 S

失敗を自覚自嘲の舌を出し
周甫

舌出すくせがつくだけでは句に
ならない。失敗を自覚して出す舌
はそこはかとなき笑いを誘って
るのである。

舌出したばかりにあまえた
にされ H

まだ舌を出してと母を案じ
させ S

里帰り舌を出す癖まだ残り

読ませる



不二田一三夫

句会では、選者が目で読んで選
句したものを出句者に耳から句意
を感じとらせる。

これは娘のコであります。
と、当て字を説明する場合があ
る。以前、ハンドバッグをバック
と書いた句が入選したとき、選者
はバック(背景)で抜いたが、句
主は手提げ袋(バック)だった。

叱つたら娘可愛い舌を出し
功

舌を出す癖を叱れば舌を出
し ひ呂し

舌出してあまえたにされたとい
う句は浅いと思うし、母を案じさ
せたいのももう一つびんこな
い。里帰りの句には稚拙さがある
が素直なところがよいと思つた。
娘可愛い舌を出しは説明がす
ぎるといえる。それは次の句の癖
を叱れば舌を出しという良い表
現を味わってほしいと思う。

舌出して居るとも知らずチ
ップやり A

笑顔で礼あとで舌出すアル
サロ娘 R

後味の悪るさは舌を背に感
じ 静水

一二句ともそれだけのことしか
現われていないが三句目はしっか
りとした詠みぶりで好感のもてる

さいわいどちらにも通じる句だっ
た。ラジオ大阪から二月に三本抽作
が出た。

懐かしの主題歌集歌はよみがえ
る

お笑い宝恵籠

放送局の注文は「おもしろく」
とあった。目で読ませるのは「文
字」という魔術があるから案だ
が、耳からとなると非常に神経を
つかねばならなかった。

金色夜叉から

女一貫一という男性はあまり好か
ないわ

男一どうして?

作品である。

ハイハイハイ返事だけして
舌を出し 柳瓢子

レジスタンス下向いて舌出
すだけの 光道

返事だけしてという情景はよく
まとめられていて佳句だと思つ
た。レジスタンスの句はその表現
方法に於ても面白いと思う。そこ
にいくらかの哀愁があるのも佳
い。

舌出したとたん以後ふり向
かれ 静水

鋭いのがちを持った佳句であ
る。

舌を出したという古句を二三参
考にすると「いただいて仕着せの
不足舌を出し」「起き起きの不機
嫌下女は舌を出し」「町内で舌を
出し出し嫁の供」などというの
がある。

舌代は掛売り一切お断り
静観堂

次回研究題「綱」五句以内
発表予定 五月号

次回研究題「綱」五句以内
発表予定 五月号

宛先 大阪府南河内郡美原町丹上
四〇四 清水 白柳

女一男のくせに女性を蹴つとばす
なんて

男一だけ蹴つたのはお宮が先き
だよ

女一お宮はそんなことをしなかつ
たわ

男一だって貫一の切ない思いを蹴
つたのはお宮が先きだった。

このサゲは読めばわかるが、耳
からでは「蹴つた」が全然生きて
いなかった。「お笑い宝恵籠」の
ほうは小春団治氏がしゃべって
くれたから商売柄サゲなどもハッ
キリしていた。

耳からでもわかるコトバを、ボ
クはボクなりに句会で勉強したい
と思っている。

舌代という語はもう生きていな
いかも知れない。都会ではもうこ
ういった値段表を掲げている店
はないだろうと思う。作者の年令が
詠ました句である。

舌打ちをされたという鋸自体の
ことになると思っているのでこの場合は
「舌打をした鋸は深く切り」では
ないかと思つたがどうであろう
か。

無器用な奴と老工舌を打ち
初甫

名人気質の老工をよく描き出し
て成功している句である。私も作
句したのだが思うようなのが出来
なかった。

釘くわえ大工の舌は器用なり
白柳

次回研究題「綱」五句以内
発表予定 五月号

「犯人はあ奴だ」

ストリーと川柳



土井文蝶

欺まされてからでは遅い慌
てよう

今の夫と結婚したのは二十才の時、だった。真面目でよく働らくと言う仲人が二人を結ばせ、まもなく二男二女の母となった戦争中も夫は徴用工として、軍需工場で働らき自分もささやかな、仕事で幼ない子供をかかえ食料難と闘いながら家計を切り盛りした。そうした苦勞を積んだ、自分だったがあんな男に欺されたのが悔しかった。家族の者にも済まない心で一ぱいだった。でも子供達も今では皆んな生長して工場に働らいて家計を助けてくれるので、今度の場合でもお母あちゃん心配せんでもええ、うち賞与もう直きや、穴埋めしたげるさかい心配しなやと、一番下の女の子が言うてくれたし、その上の女の子も母想いで自分のポケットマネーをそつと握らせて、力つけてくれた。男の子はどう都合したのか母の心配を一気に吹っ飛ばしてくれた。こゝんな出来事があって日頃世話好き

だったせい、近所でも皆同情して呉れた。

こんなことは町内に拡がるのに、そんなに時間はかからなかった。人に同情されたり、うわさが拡がるにつれ、あの憎い犯人の顔が想い出されて忘れ得ぬものになっていた。

その頃警察では必死の活動をしているにもかかわらず犯人の手がかりはつかめなかった。今までに判っただけでも四件で、まだ統発を予想された割合地味な事件だけに新聞にも出なかつたし刑事は黙々と事件に取組んでいた。

係の刑事は日曜日にも返上の有様だった。勿論係の部長刑事は部下を指揮して八方に、網を張っている、第一その玩具の一万円札の出所を突きとめるべく、松屋町の玩具問屋街を当らせて、その発売元の発見に努めた。その結果日という御問屋でその品を扱ったことが判ったのであったが、なに分毎日何百人と出入商人との取引があるので、ここの詐欺に使用された

玩具の一万円札は、どこの小売店に売ったものか判らんというようなことで卸元が判っていないながら小売店がつかめなかつたのである。犯人の指紋も発見されず手がかりとなるのは犯人の顔と、その手口だけだった。

数年前にはAの近所へ流れ込んで来て住んでいた男がペーパー詐欺で、捕まったことがあって、そんなことを思い出して近所でも今度の事件と関連させてうわさの種にした。

そんなある日刑事がまたAの家へやって来た。聞き込みに来たのだ。前と同じように返事をした刑事は言った。どうせ捕まっても金は戻らんやろが横面の一つも張ってやんなはれ、そしたら気もすみますやろう。捕まったら面倒でも来て頂きますようにと刑事は帰って行った。千子は日が経つにつれ自分の愚かさも忘れ、当時大きな被害のように思っていた金のことさえ自分の記憶から消えかかっていた。

もう夫も息子も娘もそんな過去には触れたがらなかつた。そんなある日ちようどその頃午前の用事を済まし昼食後のあと始末をしている時だった。この町内で米の配給所や酒の販売をしている主人のDさんが飛び込んで来た。

なにか非常に慌てている様子なので
千子「何か用事ですか」

D「一寸来とくはなはれ、顔見とくはなはれ、それそれこの前お宅が話してはりましたあの詐欺の犯人らしいのが来てまんねん、一べんあなたに顔たしかめて貰らおと思つて、早よ来て貰えまへんか早よせんと逃げてしまひよるさかい」

千子「え、ほんまだっかいな、よろしおま、すぐ行きまっさ」とつさのことだったが自分でもびっくりする程の速さだった。Aさんの家からももの三百米と離れていないBさんの留守宅へ留守番の年寄りを欺しに例の口で現われたというのであった。おばあさんはうまく犯人を待たしておいて近所へ連絡してAさんに首実験をして貰らう為呼びに来たというのであった。馳せつけた時に犯人とBさんの家の前で、ぼったりと出会った。とつさに大きな声で叫んだ。

千子「犯人はあ奴だ」

その声に應じるように近所の人達二三人飛び出してきた。その勢いにびっくり仰天した犯人は逃げ出した。追いつ追われつする内に犯人も力がつきたのか捕まった。民間人に捕まったのが残念そうに引かれて行った。

千子も犯人逮捕に活躍した一人だったが横面の一つもよう張らずに終った。

(完)

★川雜コーナー★

川雜玉造支部が十周年記念句会を催すとのことである。数年前は五、六名より集まらなかつたのに、最近では毎月二十名を越す盛会である。指導清水白柳氏というネームバリユーがあるとはいえず、支部長西出一栄さんをはじめ支部員の烈々の熱が今日の大を築き上げたのであろう。

今では大阪川雜支部の双へきとして阿倍野支部と共に異彩を放っているが、女流作家の多いのも支部長が一栄さんだからである。

新人づくりは玉造で——こんなことを聞いたが、なかなかどうしてベテランの柳号がズラリとならんだことは、阿倍野支部の強敵でもある。

二月の本社句会で堂々不朽洞賞をかち得た牛島水京氏も玉造支部の出身である。(F)

味の七-J

モダン 川柳

心斎橋大丸北の辻東へ

御門

TEL(271)6684

御集会には階上御利用下さい



大萬川柳

兼題「多数決」

入選発表

選者 麻生路郎先生
投句総数六百七十三句
入選 三十九句

赤旗のはこりを払う多数決

二次会へ足が重たい多数決
山口典豊

よんどころないのおおつて多数決
玉島千翁

多数決隅の意見がソデにされ

赤坂で票読み終える多数決
玉島旭峯

友情にひびがはいった多数決
大阪福郎

立行司四対一で土がつき
奈良一麦

多数決にしといて婦人会探める
大阪十六里

姉ちゃんがウインクしてる多数決
岡山宗義

多数決貧乏人へ味方せず
兵庫一鶴

多数決鴨平フルタース汝もか
大阪晃

多数決できめた奉仕に出て来ない
和歌山木魚

陳笠が万歳をする多数決
声屋一十

多数決最初の一人サクラめき
同

多数決となれば居既り起される
奈良凡茶

ワンマンが握りつぶした多数決
笠岡遠二

給料日B Gどつとお好み屋
大阪清人

多数決を阻んでみせる顔を出し
岸和田きさ子

探決へボスのまたたきしきりなり
大阪文秋

多数決へ良識まげるホロ苦さ
大阪春葉

焼いもが断然いいわと声揃え
大阪阿茶

主流派も寝覚めの悪い多数決
見島恵二朗

質などはどうであらうと多数決
大阪柳志

多数決ですよと辞表うけつけず
福岡文平

ワンマンの目にあほくさい多数決
大阪良

多数決やからとなだめる側にいる
同

筋書が出来ていました多数決
同

同 圭水

大人から守れなかった多数決
同

多数決右も左も敵ばかり
大阪小松園

でしゃばりの出鼻をくじく多数決
同

雑音が一度に消えた多数決
同

金のかかる方に決った多数決
大阪福郎

一晚のうちに変わった多数決
和歌山木魚

多数決父の権威をふみにじり
声屋一十

多数決衆愚あつめて憚からず
大阪水客

異議なしの役もきめとく多数決
大阪梅里

人ノ句



灘・魚崎
大塚合名会社醸

多数決叱られ役に推されたり
見島恵二朗

多数決またまた中華料理なり
大阪阿茶

地ノ句

天ノ句

多数決乾杯悪法ご誕生
大阪良

昭和三十七年度
★ 大萬川柳ベストテン決定

- 一 松江梅里 二、六五 大阪
- 二 本多柳志 二五、〇 大阪
- 三 服部十九平 三三、〇 岡山
- 四 内藤ささ子 二二、〇 岸和田
- 五 傍島静馬 二〇、五 神戸
- 六 西川晃 二〇、五 大阪
- 七 田村藤波 一九、五 岡山
- 八 伊集院良 一九、五 大阪
- 九 田垣方大 一九、〇 倉敷
- 一〇 辻圭水 一八、五 堺
- 一一 本田恵二朗 一七、五 児島
- 一二 本多清人 一七、五 大阪
- 一三 木山遠二 一七、〇 笠岡
- 一四 金井文秋 一五、五 大阪
- 一五 永松東岸 一五、五 岡山
- 一六 山川阿茶 一五、〇 大阪
- 一七 正本水客 一四、五 大阪
- 一八 吉田圭井堂 一四、五 堺
- 一九 菊沢小松園 一四、〇 大阪
- 二〇 中島生々庵 一四、〇 大阪

次の兼題「一と旗」 五句以内

〆切 三月五日

〆切 三月十日

〆切 四月十日

〆切 四月十五日

大萬川柳会々則
一、本会は川柳に興味を持たれる、全国の同好者に広く呼びかけ名実共に唯一の川柳道場としてその技その韻を競い斯道の向上発展と柳人相互の親睦を図るを以て目的とします。

二、毎月の出題並びに選者は川柳雑誌社主幹麻生路郎先生によってなされます。

三、投句はすべて一句毎に句箋に清記し無記名のまま一連番号を附して選句をして頂きます。

四、左記の採点法により月々の得点を加算して順位を定め毎月ベストテンを発表します。

五、毎年三月より翌年二月までを一年度として年度間の総合得点の成績により順位を定め年度ベストテン把持者に賞状並に賞品を贈り大会の選者に推薦し、祝賀宴に招待します。但し同点の場合は前年度優位によって定めます。

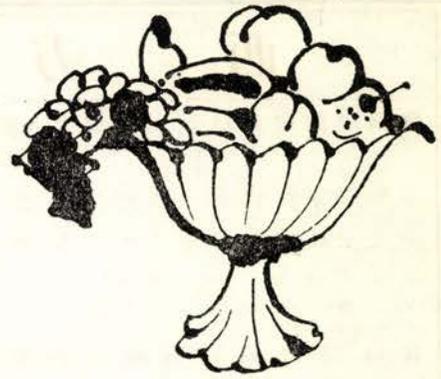
六、大会は毎年三月に行います。

七、会費は不要、但し大会の会費は百円、投句料五十円

八、投句その他の連絡先は大阪市阿倍野区松崎町三ノ一〇大萬川柳会宛にお願いします。

昭和三十八年二月

大萬川柳会



流れ

戸田古方選

流れ来て川の小石の角がとれ 周甫
 水ぬるみめだか流れに逆うて 庸佑
 観光地河の流れも名をつけて 涼人
 この川も科学の臭して流れ 圭水
 時の人時の流れに忘れられ 晃男
 激流へ中乗りさんの声はずみ どんたく
 笹舟を流す流れの水ぬるむ ひ呂し
 上げ汐のようでもやはり流れとり 圭井堂
 流れ雲に似た今日此頃の忘れよう 野迷路
 銀模様描いてはは流れ行く 蛙水
 どつちみち流れる質札ねじ込んで 初甫
 勘だけじゃもう生きられぬ世の流れ 孝正
 飲めそうな水がながれる御所の庭 淀月

路

集

雲に乗れ流れに乗れと母念じ 旋鳳
 序の口は先ずお流れにかしこまり 紀太呂
 二十まで流れ作業のよに育ち 紀太呂
 世の流れ我が身も流れ流されて 専翁
 灌ぎ場の石そのままに母は亡し 八九寸
 家鴨しばし脚を休めたまま流れ 愛鳩
 人流れ車も流れて年が暮れ 灯竿
 ゆっくりと流れて早し夜の雲 石峰
 飯場の灯流れた過去は伏したまま 壬石
 候文型でお流れ頂戴し 惠二朗
 平家の血流れる島の子の素朴 惠三朗
 流行を追わぬ娘にしたも恋 宗義
 一人旅私だけの流れ屋 楯雄
 流れ落つ滝に打たれてとり得ず 隆子
 佳
 芸妓好きな人おもう時流れ星 孝風
 ヘソ曲りヘソを曲けても世は流れ 古心
 来年もたのんで帰える流れ者 千翁

わな

大鶴喜由選

純情が年増のわなにかけられる 隆文
 そのわなの盲点をつく知能犯 秋月
 わなだとは思わが一つ乗つてみる 三五島
 お見合いのわなと知らずについて行き 寿美司
 事前運動なかなかわなにかからない 周甫
 見破ってしまったえばわなも漫画的 曉明
 予感したわなへ先手を打つたわな 耕人庵
 訊問でわなにかかった事が知れ 桂仙
 幸福の言葉に女すぐかかき 静波
 口紅のうるむ言葉にわなが棲み 和三郎
 妊娠と言ったら書くなつて出し 保
 飲むだけは飲んでもうぼりわなを抜け 句桑坊
 わなもあろうに遮二無二特攻隊 楓林
 利用するおだてもわなの一つなり 鍾愚坊

流れ作業アノジョウ機械につかわれる 桂山
 洗濯へ桃が流れてきてくれず 十九平
 人
 流れ行く後流れ行く木若し 静波
 地
 濁流が日本海へ突きさきさき 宗太郎
 天
 里へ出て流れたゴミが浮きはじめ 愛鳩
 軸
 乾いて枯れて流木白い過去

品質優良
タチカワペン
 TACHIKAWA PEN
 タチカワペン
 タチカワゼム
 タチカワ画紙
 大坂市東区常盤町一丁目十一番地
 立川ペン先株式会社

勘定は課長に頼む猪口を酌ぎ 光郎
 広告のわなに資産を摺り減らし 専翁
 ポーナスのふところあてにわなをかけ 十九平
 裏をかくつもりがわなにひつかり 雄々
 わなかけてかかれていくにくしやみが出 藤波
 盗癖の知能はわなを上廻り 八九寸
 わな張った日から猪道を変え 藤波
 指紋欲しさのお茶とも知らず有難う 孝正
 痴漢また挙らず婦警のアイシャード 宗太郎
 仕返しはわなとは知らずはまり込み 初甫
 わな掛けて帰る猟師の肩の雪 蛙水
 採用に条件がある下心 代仕男
 兎狩りわなへ追い込む勢子の声 ひろし
 美人局と気づいた時は遅かった 圭井堂
 採用に退職金注げのわながあり 瑞歩
 良い器量わなにかかってもふたぐ 可住

裸体画のわなで呼びこむストリッソ 隆史
 女房のわなにかかかって言つちまい どんたく
 わなも知らず甘い言葉に乗る若さ 黒天子
 子のわなへわざとかかった親心 圭水
 多救決のわなに正論ひっかかり 光道
 親切をわなとも知らぬ家出の娘 勝子
 お人よし見す見すわなにかかりに米 晃男
 千軍万馬女のわなに落ちたふり 涼人
 思惑もあつてわなにひっかかる 庸佑
 わなかけた朝は子供に起される 宗義
 甘言の後にわなが待っており 杏花
 お人よしわなとも知らず印を出し 愛鳩
 香具師のわなさくらの次にひっかかり 灯竿
 地面師のわなにかかった欲の皮 生薑
 九俣の功を一簣に落し穴 公峰
 役員にされたは酒を買わずわな 古心
 俺のスケどうするわなにひっかかり 同
 受判が家までつぶすわなだった 弘朗
 東京のどまん中にもあつたわな 旭峯
 ウィスキーさつと紅茶に交ぜたわな 惠二朗
 言質をとる巧妙な記者のわな 同
 わな抜けてそれから隙のない女 玉石
 裏と表世間にこんなわながあり 卯之助
 親切がこんなわなとは知らなんだ 孝風

佳

わなの前まで来て小鳥向きを変え 孝風
 甘さにははつられわなには引つかり 隆子
 今頃になつてわなだったと気づき 素身郎
 友情のはのかに残るわなの跡 野迷路
 うれしがらせる言葉男のわなだった むじな
 十七歳のばく進わなにひっかかる 八郎
 与えて取るその戦法にうかと乗り 軸

外交

森下愛論選

化粧品セールスお客とまわがわれ 寿美司
 外交の気楽さ二時間程喋り 秋月
 外交員恩師であつて困る妻 三五島
 外交員子供をほめて荷をおろし 周甫
 外交員になつて浮世の味を知り 孝正
 親善外交天晴れキノのプリンセス 旋鳳
 言づけもさされ外交板につき 桂仙
 欠伸かみしめて外交辞令聞く 十九平
 外交員同窓会の名簿くり 淀月
 外交の秘訣通りに米ぬ相手 藤波
 外交の手綱を締め妻達者 千翁
 セールスマン衣服に月給追われと 初甫
 外交に廻され酒の味おぼえ 蛙水

親友を廻る外交初手の内 同
 家族皆女房外交の線で行く 野迷路
 支店長代理と刷つて外交員 和二郎
 喰うための外交押せるだけは押し たもつ
 外交肌赤字もなんのそのおごり 光郎
 親善に着物外交深めて米 静水
 外交の話でヒント得た儲け 専翁
 外交のうそにへそくりまき込まれ たけお
 口先の猛者を揃えて涉外課 ひ呂し
 外交官派奇の場所もおぼえおき 瑞歩
 外交の秘密パチンとしまい込み 可住
 外交員待つだけ待たされ断られ 隆史
 外交へ振袖一役買つて行き どんたく
 実力のない外交で腰くだけ 愛鳩
 外交員今日も犬だけ見て帰り 宗義
 外交の一つとゴルフに凝り初め 生薑
 外交のベテランという古カバン 石峰
 同情もされてセールス断われ 旭峯
 セールスにゴットマネーという資本 灯竿
 遊んでるように外交見られそう 卯之助
 外交は犬の散歩をねらつて米 橋雄
 外交の足代馬鹿にかさんでき 隆子
 お人好外交辞令に踊らされ 素身郎
 外交の靴が重い売れ残り 宗太郎
 お色気がからむ外交へ歯がたらず 同
 美しい外交員の根に負け 雄々
 外交は押されて鮭も高くなり 同
 外交が一つ取り得といえる椅子 暁明
 外交は見事な名刺差出だす 同

如才なく話せ外交まかせられ 代仕男
 息切れのせぬ外交の核武装 同
 外交官安楽椅子の重い責 同

佳

外交のこつでまとめた御良縁 圭井堂
 外交も握手の中にある打算 弘朗
 ステテコで行く外交で酎を飲み 静波
 本筋に入るまで趣味の長話 八九寸
 借金を残し外交員が消え 静水

人

外交のうまさ汚職につづく道 孝風
 外交を盾に出歩く妻になり 古心

天

外交家舌七色に使い分け 惠二朗

軸

町内のニュースも運ぶセールスマン

色紙短冊
 書画用品
 大坂戎屋
 丹月堂
 電中セニセニ

紅溪
外語カクテルオトイレには恐れ
入る
柳葉

は外来語を無批判に使う、日本人の急所
をついていて面白い。

こうして現在母国で使用されている、
外来語のことを書いて思いだしたのは、
先頃 Y という方から電話があつて、あの
天文の昔(一五四三) 葡萄牙人が九州
種子島に漂流、初めて洋式鉄砲を伝えた
当時から、我国との交渉が始まったのだ
が、以来多量品として種々な珍品が輸入
されると共に、次第に葡萄牙語が伝ってき
て日常語となり、それが日本語として現
在まで残っているが、そういった言葉の
ようなものが、大学図書館にあるかとの
問合せであつたので、図書館には、葡
語から転化した日本語彙集はないが、外
米語辞典があるから御利用下さいと返事
をしておいた。

こんなことから例の好字癖がムラマ
と起つて、一つ葡国語から転化した日本
語にどんなのがあるかと、自分の記憶か
ら外来語辞典を、ひいて集めてみた。そ
の中には我々がこれまで純粋な日本語と
ばかり思い込んで使っていたのも相当あり、
天文時代の新しがり屋が、舌を噛み
そうなむずかしい発音をして使つた葡
語が、今では立派な日本語に転化してい
ることを考えると、問題のレジャーもイ

シスタントも、百年先には御先祖が使用
した日常語ということになってくるので
はないかと思つて思わず苦笑した次第で
ある。

それでは一般読者に親しみの深いのを
撰つてお目にかけよう。

- ARUHEITO 阿平語 Alfeloa
- BIIDORO 碧子 Vidro
- BIRODO ヲロト Veludo
- BÖBURA 餅瓜 Abobora
- BOTAN キタン Botao
- KANAKIN 金巾 Canequim
- KAPPA 合羽 Capa
- KARUTA 歌留多 Carta
- KASUTEIRA カヌテラ Castella
- PAN パン Pao
- RASHA 羅紗 Raxa
- KONPEITO 金米糖 Confeito
- KANTERA カンテラ Candela
- JUBAN 緋袴 Jibao
- SHABON 石鹸 Sabao
- KOPPU コップ Capo
- TABAKO 煙草 Tabaco

葡国語を最初に学んだ日本人は、一
五四〇年ゴアに渡つた里見弥次郎で、室
町末期から徳川初期に至る。約百年間、
常に時代の尖端にあつて新鮮味を与えた
ものが葡国語であつたことも——歴史は
繰返す——丁度現代日本人が何でも英語
でありさえすれば、矢鱈に使いがたの
と思ひ合せて甚だ興味深い。

- 田村 藤波
- 白井 三林坊
- 下山 清潮
- 木田 惠二朗
- 松川 杜的
- 馬場 夢生
- 村上 ゆづる
- 森本 法泉子
- 小池 しげお
- 竹内 圭三
- 松村 万古
- 浜野 奇童
- 橋本 幸男
- 高崎 雄声
- 高橋 操子
- 西尾 青一郎
- 平田 三郎
- 藤井 東朗
- 永松 東岸
- 野田 素身郎
- 永藤 弥平
- 神谷 凡九郎
- 清水 望峰
- 木村 十哲
- 伊達 堰子
- 坂田 東洋男
- 志水 礼司
- 不二 二三夫
- 酒井 ひか平
- 深見 雅堂
- 松下 一樓
- 松原 初花
- 津川 秋甫
- 丸野 旭泉子
- 笹岡 回天子
- 池田 古心
- 石居 高志
- 小倉 へとち
- 早川 清生
- 西田 清栄
- 酒田 清平
- 平井 清平
- 阿部 柳太
- 西田 柳宏子
- 辻岡 委滄浪
- 松岡 恒雄
- 中松 立美
- 安部 迷羊
- 野島 与志
- 児島 美舟
- 小浜 牧人
- 菱田 満秋
- 前川 左文字
- 池上 知恵美
- 西川 三郎
- 高尾 青一郎
- 橋高 薫風子
- 中村 九呂平
- 多田 はなみ
- 山田 伊三男
- 宮口 笛生
- 榎本 露児
- 石坂 新雪
- 城川 吾柳
- 西川 晃
- 田中 蛙眠子
- 野田 一念
- 山本 立兒
- 林 葵丘
- 仲 どんたく
- 久家 代仕男
- 木多 柳志
- 原 独仙
- 大谷 月都
- 江国 幽谷
- 光好 陽子
- 河相 すすむ
- 河相 すすむ
- 樋口 鷲江
- 樋口 鷲江
- 高野 むじな
- 辻 白溪子
- 吉原 紅月
- 内海 敬太
- 川海 敬太
- 内山 一声
- 横山 一声
- 関戸 宗太郎
- 高平 次弘
- 安平 次弘
- 渡辺 曉童
- 井阪 東天
- 高橋 尚史
- 辻川 喜仙
- 浅野 芳朗
- 川岡 靈眼
- 石井 かん彦
- 中内 孚彦
- 杉本 一鶴
- 本多 清八郎
- 浅川 八郎
- 内藤 きさ子
- 木村 涼人
- 城 一舟
- 牛島 水京
- 唐崎 専翁
- 奥谷 弘梢
- 藤岡 花梢
- 岩田 美代
- 松本 吉太郎
- 置田 ふじ
- 遠山 可住
- 河原 みのる
- 隠岐 不醉

柳界 展望



豪雪のあと

「降り積んだ上に屋根雪のおろしたものが二尺ばかりあります。道路は既に除雪した跡です」と金沢の河合卯翁氏から一寫真は卯翁氏（二月六日撮影）

催す。春近しを思わせる宵柳友
お誘い合わせの上多数の御出席を
お願いする。▼南区医師会文化部
杏林川柳句会（大阪市）は二月十
九日（火）午後七時半から三休橋
南詰中島小児科診療院楼上で開
催。▼南海電鉄川柳句会（大阪
市）は二月二十一日午後六時から
難波親和クラブで開催。▼ココロ
川柳会（大阪市）句会は二月二十
二日（金）午後五時半からココロ
株式会社社会議室で開催。▼大阪
信病院二月句会は二十六日（火）

午後四時半から五階会
議室で開
催。以上路
郎主幹出
席。▼川維
玉造支部
（大阪市）
十周年記念
句会は三月
十一日（月）
午後五時半
から大阪信
用金庫玉造
支店階上で
開催。▼川
維岡山支部
二月例会は
九日（土）

岡鉄クラブで開催。▼第十一回大
万川柳大会（大阪市）は三月十日
（日）午後一時から阿倍野区松崎
町三ノ一〇割烹大萬階上で開催。
路郎主幹出席。▼大鉄川柳会（大
阪市）一月句会は二十九日（火）
午後六時から高槻市の山田季登居
で開催。▼川維下関支部新春句会
は一月二十日湯本温泉旅館ゆもと
で開催。▼国鉄川柳句会第七集
の作品が募集されている。発刊予
定は昭和三十八年六月一日、参加
は全国鉄川柳人連盟会員、家族、
OB等に限られているが句集頒価
は一部百五十円。▼川柳きやり吟
社三月の句会是一日（金）午後五
時半から神田東紺屋町筆撰寺東京
別院で開催。▼第十一回中部地区
川柳大会は三月十日正午から（縮
切二時半）中部日本新聞社四階
ホールで開催される。▼ひろしま

誌は二月号をもって百五十号に達
したので発刊を記念して「グルー
プ対抗誌上川柳大会」を実施。
ールで開催さ
れる。▼第五
回花童子賞作
品が函館
川柳社か
ら募集に
なってい
る。路郎
主幹をは
じめ十二
名の選者
により選
考され、
「はこだ
て」六月
号誌上に
発表になる。▼川柳北上吟
社（北上市）三月例会は
三月十日午後七時から同市
本町放浪児居で開催。▼川
柳宮城野昭和三十八年度課
題吟会第三回目（五月号発
表）は兼題、相談、久しぶ
り、とんでもない、各題二
句、三月二十日〆切。投句
料百円、仙台市東八番丁一
七〇川柳宮城野社宛。▼柳
都（新津市）三月本社例会
は十日（日）夜三条で開
催。

▼路郎主幹は二月二十三日
（土）北区中之島の大坂府
立図書館開館六十周年記
念式典に参列された。
▼吉田圭井堂氏（堺市）は二月
十五日還暦を迎えられ、吉田家
還暦祝賀会が同日生玉御殿で盛
大に催された。とても還暦とは
見えぬ若さで活躍されて居られる
ので路郎主幹から「本人は還暦ら
しい顔もせず」の句が贈られた。
▼「はこだて」の女流川柳家の集
いが、一月二十日に喜美江宅に開
催、寄せ書をいただいた。▼中村
九呂平氏（下関市）からは一月二
十日ゆもと温泉での句会終了後、
会場は宴席に早替り、山の鶯の声
やマッチの軸の落ちる音もはつき
り聞える静寂から、一転綺麗とこ
ろにはさまったの快談、珍芸統出
へと舞台が移り一夕秋を尽くした
と、半休、侃流洞、弘道諸氏らの
寄書を頂いた。▼野尻南海氏（メ
ルローズパーク）から「日本も近
年にならぬ寒の様子ですが、こち
らも亦零下十度から二十度の日が
続いております。南部諸州の冬期

川村好郎先生を迎えて（どんぐり川柳会）

寫真説明一前列右から夢野・前波・好郎・大柳・野亭・浪路・しずか・後列右からよしゆき・清春・常人・
でける・百舌郎・夢之助・関三・治・金沢・片山・弥生・泰山の諸氏。（一月十五日羽曳野病院講堂にて）



▼第十四回愛媛春の川柳大会は昭
和三十八年四月二十八日（日）午前十
時から松山市中歩町PTA会館ホ

消息

▼路郎主幹は二月二十三日
（土）北区中之島の大坂府
立図書館開館六十周年記
念式典に参列された。
▼吉田圭井堂氏（堺市）は二月
十五日還暦を迎えられ、吉田家
還暦祝賀会が同日生玉御殿で盛

通産大臣賞受賞

軽やかな書味 楽しいお仕事！
適した硬度をおえらび下さい。
学生 事務 製図

川本 筆

不朽洞の人々



医学博士 足立春雄氏

「何でも二番手までの男、本職も藍より出て藍に遠く、専門的な研究や仕事も二番手以下、ごしてもトップに立てない男」その意味で川柳人としての号も未だ必要でない。

昭和二十四年今の職場に転じたとき先輩の方正、没食子の両氏に鳥ヶ辻句会へ誘われたのが初めである。三十数年前木水教授から古川柳を少々習ったことがあるが、風俗史的な興味は別として自ら作る気にはなれなかった。

要は自己陶冶の句としての新しい川柳を教えられた路郎先生に師事してだけの二番手川柳人である。

天平の臺と知るや燕の巢

(春雄)

出荷の野菜類果物一切が全滅の状態で、それだけでなく高い生野菜類がより一層昂騰するだろうと噂しておりますとのこと。

▼築山快夢起氏(ホノルル)市は三月三日午後五時のJALで羽田經由、那覇へ五日着、沖縄滞在三週間、帰路は九州各地、山陽、山陰を経て京阪神へ七年振り立ち寄られる由なので主幹夫婦も楽しんでられる。▼富田狸通氏(松山市)は一行六人で、二十日夜、毎日テレビの「ナンパー・ワン」で故前田伍健の正調野球拳紹介のため来阪された。▼阿部佐保蘭氏(東京都)は一月二十日第九回かはる会新年吟行の七福神詣りに参加、句集「鶴の姿」の編集もはかどっておられる由。▼正本水客氏(大阪市)は二月三日京都市の東本願寺別邸釈迦邸で開催された大鉄川柳三十周年記念大会の席上、指導者として同会に尽された功績に対し

▼賞状と記念品を授与され、同日の大会成績第一位の賞品も併せ授与された。▼山内静水氏(竹原市)は二月十四日から四百五十名の観光客の添乗として四泊五日の行程で南九州の旅に出発された。又、十二日には、新旧駅長送迎の席上川柳を贈り、それぞれの駅長に大変喜んでもらえ、川柳をしてる事に限りない誇りを感じました。氏は大鉄川柳三十周年記念大会にも京都まで出るはる出席され春巢先生をはじめ多くの柳友と交歓された。▼田垣方大氏(倉敷市)は先生の激励のお言葉を無にすることなく更に作句に精進して実力を養いたいと思っております。▼岩崎愛二氏(京都府)は御台息夫婦からおやし静養して来いと無理に言われて、一月二十五日白浜温泉に過ぎました。夫人をうしなわれた悲しみに一向春の候をそろろうじがわきそめ候」と。

▼正本水客氏(大阪市)はこの三

月末で国鉄を定年退職、同時に銀婚式を迎えられるので内助にむくいるため三月早々伊豆方面へ一週間ほどの旅を計画しておられる。「悠々自適と云うてそれから笑うとく」▼高崎雄声氏(堺市)は昨年の十二月八日から南海電鉄高野線浅香山駅で駅売店を経営し多忙と不慣れで一時はどうなるかと心配しておられたが、最近ではすべてうまく軌道に乗って事が運ばれてる由。「監居ができてるを元氣まだ失せず」▼若本多久志氏(西宮市)は大阪空港から沖繩へ出張、日本の最南端から主幹あてに、「姫百合の塔へ平和を念じつつ」の句を寄せられた。▼米沢曉明氏(大洲市)から、約一カ月にわたる雪景色を見られるという珍らしい冬を感じて、ここ四国はほつほつ春の気配を感じる候となりました。煙のすみ、家並の一角には消え残る雪が見えますが。▼岩崎愛二氏(京都府)は夫人の死去に際して寄せられた知己からの芳志の一部を、毎日放送テレビジ

ン番組の「あなたの善意を」に寄託、世の人のために献金された。▼社からの豪雪お見舞いに対し、豪雪の模様を北陸・山陰の柳人諸氏から模倣の不達、誤達の向きもあつたらうと主幹夫妻も楽しんでいられたが、編集局でもその並々ならぬ凄さに今更驚いたり案じたりしている。▼野村味平氏(加賀市)からは毎日冷蔵庫の中に住んでるようなと、浅野芳明氏(小松市)は「関会が動いて豪雪らしくなり」▼関宗太郎氏(小松市)からは、「自衛隊来てラッセルを振りおこし」、大山雅成氏(石川県)は「雪赤し蒙古の黄塵混ると」など他に櫻井六葉氏(石川県)、那谷金太郎氏(加賀市)、山本喜蔵氏(金沢市)、深田白扇氏(新潟県)、舟木与根氏(松江市)、藤井明朗氏(木次町)、河合柳翁氏(金沢市)から生々しい報告を頂いたが、格別の被害もなかったとのこと。怒眉を開らした。▼橋高薫風子氏(大阪市)は二月十六日堂友クラブの会合で京都島原、二条陣屋等

を見物、角屋での「貸の式」に一句。「落胤が目元涼しき禿なり」▼平田実男氏(宇部市)は川維支部支部の会員から成る五平太川柳会の会報「五平太」を一月号から編集されることとなった。「妻の手も借りて句報がやっ」と出来▼小西雄々氏(米子市)は二月号をもって九十七号となった松露の編集に精魂を尽しておられるが、百号記念川柳大会の企画・準備をそろそろ心掛けておられる由。

▼本社賛助・白川朋吉翁(大阪市)は一月三十日午後六時二分老衰のため、永眠された。年八十九、葬儀は二月十二日四天王寺本坊で営まれた。翁は生前大阪市民の要職などを勤め、大阪市の政界、法曹界、文化方面に貢献され昨年四月には最初の大阪市民名譽市民の称号を贈られた。

▼八木迷々(旧号毒仙)氏が二月十八日に亡くなられた。告別式は二十日午後二時―三時京都市北区鞍馬口室町西入の自宅で執行されると。(薫)

不朽洞

会から

★臨時常任理事会は二月七日(木)本社句会終了後同会場で開催。一、本年度ならびに来年度の事業計画について、不朽洞会総会について、右の案件を協議、午後九時半散会した。

新会員紹介

二月
▼隠岐不酔(姫路市) 正
▼葎乃女史推薦

(多)

いのちある句を創れ



▼用紙は原稿用紙▼文字は正
▼縮切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社 二月句会 (大阪府)

2月7日 午後6時
会場——千日前自安寺

二十五府県にまたがる豪雪禍に文字ど
おりふるえ上がった。雪のために句会の
開けない地方もあったのではないか。

昔ふうと言えば二月は耐寒句会だが黙
平八十翁もお元気に出席され、暖房のき
いた会場は春のあたたかさである。

川村好郎氏の柳話は例によって、心あ
たたまるものがあり、聴者を魅了しつく
した(内容は本誌参照)

路郎主幹もますますお元気である。不
朽洞賞は新鋭牛島水京氏が獲得され、日
頃の精進がモノをいった感があった。

(F)

出席者——路郎・句楽坊・秀子・判
志・行人・黙平・舟遊・一三夫・みさ
子・与呂志・水京・一舟・薫風子・柳宏
子・静幸・す・む・好郎・進之助・紫
香・数子・凡子・梅里・恒明・南宗・古
方・八郎・文蝶・圭井堂・静馬・水客・
柳志・白柳・玲人・草々・文秋・葉平・

緑・一瓢・雄声・いさむ・生々庵・竹
莊・多久志・夢虹・専翁・季費・庸佑・
いわを・阿茶・奈良子・霞乃

兼題「ふだん着」麻生路郎選

ふだん着で来たのも詠びて女客 文秋
ふだん着のままを見せたら尚好かれ 一舟
ふだん着へコートだけ着て妻も齢 草々
貫祿がふだん着のまま顔出させ 静幸
全快に着るふだん着の懐かしく あいき
フアンションショーふだん着で行くには気がいり
みさ子
ふだん着の老妻ばはつちいばはつちい 葉平
ふだん着で焼香に来る裏 長屋 梅里
まだ見栄があるのかふだん着で行かず 宗義
ふだん着で尋ねて来たは金が必要 季費
正直にふだん着で来て上座なり 好郎
ふだん着で善行ラッシュ浴びている 恒明
初産へ母ふだん着で来てくれる 与呂志
ふだん着の顔でないので近寄れず 隆子
ふだん着をぬぎ言葉まであらたまり 行人
ふだん着で逢いに行くとは妻知らず 竹莊
ふだん着の社長一杯酔いでくれ 薫風子
ふだん着でもないよと招く思いやり 竹莊
子を五人妻ふだん着で押し通し 進之助
藍をじんふだん着にしてお茶に凝り 阿茶
ふだん着の生地にも見栄の要る若屋 圭井堂
ふだん着で大物らしく写つさせる 水京

兼題「ムード」戸田古方選

宴終るころから末席ムード出し 静馬
会計もムードにつられ酔いつぶれ 一舟
飲めせぬくせにムードが好きで行き 竹莊
宴会のムードになじめぬもの哀れ 雄声
人柄が自然にさせているムード す・む
たたすまいきびし名人というムード 生々庵

君が代が千秋楽というムード 柳志
酒の座のムードを音痴唄い出し 与呂志
大阪のムードそろそろ怖くなり 紫香
古いものづくしの他所にないムード 旅風
財界のムードが「孫子」引き出され 生々庵
おもわくがあつてのムードあさましく 生々庵
一人だけムードをこわすのがまじり 柳宏子
未亡人或る夜ムードに負けかかり 一三夫
昨日とは変わったムードを感じさせ 庸佑
計算をされたムードにひつつかかり 同
茶の間のムード子供が作り上げ 水京
よく喋る喰べるムードのない女 玲人
妻のムードに白いエプロンがうつく 舟遊
二人だけのムード無言のままがよし す・む
ムードこわすまいと歩く玩具になつて 水客
時間気にしだしムードも何もなし 紫香
父と母がうっとり聞くりバイバル 一瓢
ムードなんかどうでもよろし食べ盛り 八郎
春のムード月賦づくめでした新居 梅里
すてこむムードヘデパート金をかけ 竹莊
気短かが揃つてムードわいて来ず 同
芸術家喜寿とは見えるムード持つ 薫風子
職人が古風なムードばかり言う 白柳
駅弁に旅のムードをかみしめる 静馬
ムードなどどつちでもよいコップ酒 文蝶
どこやらにこいちゃんというムード 阿茶
見え透いた嘘もムードの中に入れ いさむ
ムードなんて叩きあべニヤの音がする 一舟
よいオチがついてムードがかわりかけ 古方

兼題「亀」真鍋一瓢選

亀の子をおいて売れる都会なり 庸佑
甲らを干して短日の亀の池 葉平
亀眠し彼岸だろうが盆だろが 好郎

あつ動いたあの亀生きていた 古方
真剣にそれでも亀逃げてゐる 草々
アベツクのボート見ている池の亀 いさむ
浦島の気分で放す亀の池 与呂志
天王寺亀は浄土の風に生き 草々
よく見れば居る居るあれもあれも 旅風
春の陽が動かぬ亀の甲羅干す 同
酒一升で海亀水族館を首になり 静馬
此の人出亀も彼岸やなど思ひ 柳志
金婚式なる程鶴と亀に似て 好郎
鮫を奪う時だけ亀はフアイト見せ 一三夫
首出しても出さぬでも亀つかれる 柳宏子
稚魚取りのこともせぬ亀見付けられ 静馬
水ぬるむ亀の甲羅に春陽さす 梅里
亀の瞳はふかく海鳴り聞いている 水客
大亀の背で小亀の昼下がりに 黙平
手も足も出ない亀やと放り出され あいき
亀のそり春が来ている天王寺 紫香
亀ボツンとつんば長敷にいる姿 水客
先きのした池へはられた米た小亀 黙平
親類の顔が揃つた亀の池 竹莊
ぜに亀に羽根が生えてく戎橋 雄声

兼題「名画」菊田いさむ選

マナービル株を名画に乗りかえる 旅風
絵心が無いのも来てる名画展 多久志
名画展デイトは横目で見て通り 静馬
値段だけ聞いて名画だと思ひ 白柳
評判の名画が見当らない画廊 一瓢
ピラの画わからんけれどどほでおく 一三夫
古物屋の埃かぶつていた名画 旅風
いくたびか戦火を潜つて来た名画 玲人
虎の子の名画一枚老夫婦 みさ子
説明をきいて名画を見直す 古方

盗まれて名画がニセモノだとわかり
これが名画かいなと素人素通りし
表装の敏名画らしくさび
会場の一番奥にある名画
コレクション名画へ税吏の眼が光り
よう知らぬのに名画らしいと自慢する
よう知らぬのに名画と聞いて売り惜しみ
教科書で見た絵があった名画展
実篤が描けば南瓜も五千円
ベレー帽名画バックに写される
裸体美の名画は俺にもよくわかり
凡人に分らんさかい名画だす
逆光線か名画の裸婦は神秘めき
国宝の絵だから二三歩さがつてみ
名画盗難一般には縁がなし
いさむ
席題「洋間」 橘高薫風子選

新築の洋間の花は娘が活ける 阿茶
母前で坐り書斎は洋間なり 同
立志伝洋間で写真うつされる 夢虹
仲人の返事は洋間通り過ぎ 黙平
洋間からピアノも洩れて桜咲く 多久志
豪華な洋間先代の遺影つつましく 生々庵
顔を見て洋間へ通す客と知り 玲人
子供らの洋間の裸婦が派手すぎる 同
居心地は豪華な程にない洋間 すゝむ
バイヤーが日本の洋間気に入らず 静幸
田が売って洋間出来たが牛が鳴き 句楽坊
お行儀の悪さを洋間育ちにし 阿茶
日本間と洋間の暮しパン茶漬け 文蝶
洋間なら洋間のように応待し 生々庵
何もかも月賦で洋間かざりたて 竹莊
五六冊読まない本がある洋間 紫香
洋間のソファへ黒猫がよく似合い 夢虹

仏だんのご先祖洋間に落着けず 静馬
洋間から隠居へつづく長廊下 葉平
自慢する洋間で客を一人にし 静幸
洋間から六甲山が眺められ 紫香
展覧会ほど釣つてある洋間 古方
洋間から庭の苔など見えてくれず 水客
洋間では気怪に恋が口にでき 夢虹
洋室のムードご飯を皿に盛り 進之助
洋間だらけに目立つ成り上がり 生々庵
洋間ではざつぱらんにゆかぬ酒 すゝむ
老僧自若洋間で茶をすすり 夢虹
見るからに洋間で育つたお嬢さん 薫風子
席題「雪」 小川恒明選

ハンドルを持っては雪景色言うとなす 柳宏子
雪のせてのせて貨物車駅につき 紫香
北陸の雪豊年と喜べず 草々
過不足のない雪でこそ賞でられる 圭井堂
静かなる雪黙々と世を圧し 一三夫
雪山に死にたし少女の日の日記 夢虹
メートルの嵩ではピンとこない雪 圭井堂
雪を見ぬ子へ初雪あつけなし 舟遊
大声に皆起こされた雪の朝 圭井堂
積りすぎた口とは別のことと思う 水客
掌へ雪うけるとける悲しみ 夢虹
雪山へ黙とうしばし遭難記 水京
雪国に住む子ら土を恋しがり 晴佑
台所へ響く冷い雪だより 一瓢
新口の雪も親子の情でとけ 阿茶
ばらんすをくすず大雪降りやまず 文蝶
思わざる南国土佐で雪に会い 多久志
雪見酒濡れぬほどに降りつもり 静馬
ほとほとの雪なればさあ飲めもする 圭井堂
席題「未練」 金井文秋選

いい時もあるさと未練口にせず 恒明
脈ないし他人にわかつてる未練 阿茶
潮時が大事と未練に言いきかせ 生々庵
言いわけと一緒にわたした皿ついで見る 水京
肩たたかれて済むほどの未練 水客
打ち明けからの未練は笑ろて済む 同
口だけは未練残さぬ事を言い 紫香
未練まだ持ちつづけてる電話切る 与呂志
ふられてもやっぱり逢いに行く未練 竹莊
未練なく飛び込む前に下駄並べ いさむ
子に未練あつて泣き戻って来 梅里
未練とは見えぬが言葉ふるえたり 一舟
愛情と金をくらべている未練 すゝむ
脱毛しばらく指で丸めて見る未練 一瓢
用のない女になって割りきれず 文蝶
未練まだあると家裁も気を利かせ 柳志
まだ未練あつてこそ塗るチック 一瓢
汽笛尾を引いて未練のテープ切れ 草々
未練まだ声だけでもとのぞき込み 進之助
とつくりの底のしずくにある未練 梅里
あつさり未練の写真焼く若さ 与呂志
焦げつきに未練があつても貸し 白柳
割り切っていたのに未練らしい夢 恒明
振りかえり濡れた瞳で佇つたまま 梅里
まだ未練あると仲人取り合わず 好郎
ラブレター別れてからもまだ残し 文秋
(庸佑清記)

川 玉造支部会 (大阪市)
西出一栄報
かき餅は乾きましたとそり返り 珠笑
ひねり文帯には喜んで落着かず あいさ
迷い子が福笹持つて西成署 季生

ミス戎どこにいるやらもまれて来 白柳
えべつさんの帰りに宝くじも買ひ 天真
雑煮餅正月の味噛みしめる 清子
野兎の目に人間という猛獣 晃
スモッグで我家のうさぎ汚れて来 城東
野兎は神代のころの立役者 天樹
年貢状うさぎのひげを描き忘れ 豊子
舞台中跳ねてパレーの名演技 喜久堂
無責任時代躍つて跳ねて青春期 一栄
御祝儀にちよつと相場も跳ねて見せ 柳宏子
蚤必死はぬ上りはね上り指を逃げ 風仙洞
ぬくもりの残る手袋かしてくれ 寿美司
河豚鍋に子等のホップも紅きす 政子

38年度全出席者(二月現在)
路郎・八郎・文蝶・進之助・庸佑・薫風子・玲人・すゝむ・白柳・柳志・竹莊・一三夫・判志・一瓢・水京・一舟・水客・古方・行人・季子・数子・いわを・季費・専翁・奈良子・舟遊・みき子・南宗・圭井堂・静馬・恒明・多久志・生々庵・柳宏子・いさむ・紫香・与呂志・文秋・梅里・阿茶・静幸・宏子・葭乃

天位受賞者
②水客①旅風・すゝむ・竹莊・生々庵・恒明・南宗・水京・一舟・雄声・夢虹・圭井堂・好郎

不朽洞賞杯受賞者
旅風・水京

ぬくもりの座席に残る客の味 清
虎の子が気になり長湯しておれず 一舟
美祚子
〜そくりのぬくもる暇なく無心され 文 秋
残業は汁のぬくもり待てず食い 珠 笑

川雑 阿倍野支部句会 (大阪市)

金井文秋報

敗けてから護國の鬼がかはれず 梅 里
家建ててから友達はよりつかず 柳 志
手の出ない家ならなんぼでもあるが 良
変人で通りまっすく生きている 柳宏子
案の定噂 通りに行 詰り 圭井堂
国言葉聞こえそそ降り支度 静 馬
打ち明けてしまえと噂取巻かれ 玲 人
国訛りつい善人と思ひ込み 多久志
青雲はならずわが家も遠くなり 文 秋
天星を象徴とする 国でよし 生 薑
逢う事も出来ぬ噂にしてしまひ 南 宗
ここがその国税庁かとにらんどき 十 悟
挨拶も四角四面に 国の 岳 父 八 郎
人一倍苦勞の甲斐の貯金帖 文 蝶
国を出た意地を都会で喰いしり 専 翁
世逃げて来たとは言わず国自慢 一 舟
働いて働いて入院という 癖 凡 子
欺された男の家の見える丘 小松園
人情を話せぬ人に 金があり 薫風子
冬眠のようにいこいの眼をつむり 狂 二
風呂敷にされた国旗にある歴史 恒 明
あばら家に光る祖先の御仏壇 双 葉
舶来が好きで異国のむこを持ち あいき
恋人の家から気になる声もれ 宗 義
意いの場合と女が付いており 喜 仙

川雑 ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起報

怠けてる癖に背のびをして帰り 万里歩
背だけはババより高いティニイジャ 萩 路
トレンのあとが背中中で地図になり 須磨子
背戸の柿熟した便り 秋 恋 し 紅 溪
孫の守り背負うてくれなと嫁は言い 静 紀
背中かくたびに腹立つ自分の手 押 山
この親にこの子あったか高い背 あき坊
功勞賞喜ぶ祖父の丸い背な 弦 月
背を向けて聞かぬ振りも耳を立て 紅 茶
孫の奴背中めがけて飛んでくる 暁 舟
膝で泣く背中でも泣く飯は焦げ 内 海
表情の可笑しさ柱で背をこすり 平 八 郎
キャンプでは背中合せに住んだ仲 浅 太
子に託す夢を明日へ背のびする 柳 葉
母の背をさすれば骨が手にこたえ 快 夢 起
酒臭い息を背中で 桶にする 笑 有
深入りをしなさんなよと背をたたき 魔花魔
獅子身中の虫と背信さげすまれ エス子
師の背の中流す出で湯のあふれたり 銀 月
骨丈けの背なのに孫は恋しがり カロ女
うたた寝の背中に残るゴザの跡 一 つ 葉
気合かけ師範得意の背負 投げ 静 杉

川雑 京都支部句会 (京都市)

田中鳥雀報

兎追えば朝陽に雪女郎が笑う 磯
何の相談か兎の 集り 親 生
予期はしていたライバルの失笑 高 平
鍵穴がみだらな失笑をしている 鳥 雀

名を忘れた妓ににやにやと笑われる 紫 蘭
忘れものに骨箱がある京都 駅 如 洲
忘の字と忌の字がどうやら接近し 生 薑
断水の水を守ってアルミ鍋 幸 男
断水の夜のチャルメラが遠すぎる 山 紫 楼
断水の町どこかで子が産れ ゆきら
冷え性のいやに命令口調なる 司 郎
冷え性にいいよと夫婦はたん鍋 高 雄
冷え性が雪になる夜を言い当てる 和 三郎

川雑 宇部支部句会 (宇部市)

津秋六花報

えびで鯨釣れそうに言う証券屋 東 村
せちがらさえびへ釣られる鯛がいつ 実 男
直角に別れるデートのえびと蟹 万 年 青
えびで鯛釣る気小さな恩を売り 山 峰
二度の動めはしへえび殺煎じられ 生 薑
伊勢えびの髭を板前大事がり 六 花
大安まで伊勢えびいけすで永らえる 弘 道
ハンターが二正の兎に気が迷い 南 風
獺犬にはいがられる獺天狗 花 田
化されたようにハンター道を訊き 浪 夫

川雑 岡山支部句会 (岡山市)

浜田久米雄報

春を待つところ葉草など煎じ 久米雄
あんな事も愛し愛され春の土手 宗 義
家計簿で小父の逝去の日を調べ 幽 谷
外は雪崩しともない 四 疊 半 一 声
見得を切る主役へ雪のひとしきり 葵 丘
雪見酒しやれた気持で風邪をひき みのる
夫待つ豆腐宵から雪になり 胡 風
留守番はヨガの真似して時移さ 照 路
新築は夢あばらやの住みよくて 美 舟

食品と原資材機械包装の総合誌
食品と科学
Food Science
本社 大阪市北区薄蔵町5 (361)9373代
支局 東京都千代田区神田蔵治町2 (291)9629代
名古屋市昭和区村田町2 (88)9069

川雑 米子支部句会 (米子市)

小西雄々報

目度度きは初日幾歳重ねても 素 瓢
つれだって大社へ若い初詣 みどり
年一つとっても同じ夢を抱き 一 保
正月は孫の来るのを待ちかねる まさよ
屠蘇嬉し年重ねても重ねても 明 甫
年賀状去年と同じ文字で来る 雄 々
近況も添えて年賀の久し振り 無 閑
幸福を願うあらたな年が明け 吾 柳
年越しの酔も引越ぎ屠蘇機嫌 一 机
願いごとばかりが多いお正月 秀 峰
元旦の朝挨拶の型どおり 詩 郎

無責任時代師走の街さびし 幸子
 西風に向いたベタルを重く踏み 祥月
 風向きの変わる予報へ浜に立ち 好江
 歎の子が高い苦情の忘年会 蛙眠子

川 雑

土佐支部句会 (高知市)

川竹松風報
 給料前笑声もなき定休日一枝
 スクチュール組む定休日にある若さ 斐山
 いつからか娘机に鍵をかけ 勝喜
 アパートの鍵を女がそとくれ 三郎
 愛へ鍵ゆるめて貞女のはつとる 寛

初めからこうと師匠のおどりの手 和
 はじめよし終り悪しと辻八卦 勝子
 はじめから妻にする気でない女 利子
 ポーナスのない寂しさに耐る職 山里
 惜しい人逝かせて年も暮れてゆき 十面子
 人生を寂しく思う十二月 海鳥
 顔洗うのを忘れていた年の暮 松風
 四十の免許に遠い墨をぬり 是る江
 無芸だが酔えはうるさい部に入り 和泉
 注射より効きさうに言うコップ酒 康之介
 少々の風邪なら酒で治す父 直喜

大阪通信病院川柳会 (大阪市)

橋本幸男報

人相の悪さ買われて仇役かおり
 人相を変えたカメラをほめちぎり まさる
 末っ子の嘘へ親馬鹿ひっかかり 幸男
 暖房は日のあたる頃きいてくる 草右
 暖房が入ってからの風邪をひき 春雄

間を賃した人に留守番ばかりきき 春菓
 もう媚る姿態覚えた女の子 汲食子
 ややくそになってと言訳静かに 敏行
 酔さめの部屋静かなりもの思ふ 竹青
 忘年会どころか師走にげ廻り 竹荘
 デパートも追みせわし師走なり ハナ子
 料理人小指の先で味をきき 愛論
 女悲し趣味まで変えて恋に生き 露児
 和服きて女らしさを取りもどし 宏子

杏林川柳会 (大阪市)

中島生々庵報

名曲も最後はジャズに牛耳られ 一哲
 名曲は静かに棚に据え置かれ 一伸
 名曲がなまます声をまたはずし 阿茶
 第九でも楽隊という おしちゃん
 団平は三つ違いで名を残し 無名林
 気苦労をかけっぱなしの親は近き 野迷路
 気苦労のない振りま程いじらしさ 瑞川
 気苦労なことに後妻が若すぎる 生々庵

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭水報

試運転の名士の中にいる誇り雄声
 試運転乗りたい顔に見送られ 宏子
 試運転客乗せるより気を使い 圭水
 停年期悲喜交々の試運転 八郎
 試運転万事OKあとは酒 句念坊
 場末はどエトリッパは派手に持て 静幸
 試運転あの山この島迎えられ 路郎

コクヨ川柳会 (大阪市)

川口理休報

賢妻のうしろ姿に疲れ見せ 瑤己

疲労等さしたることでない若さ 理休
 宝物はどうやらどちらも儼らしく ぼたる
 クラス会社社長も混りオマエオレ 柳波

明和研究会 (西宮市)

樋口舟遊報

くせ三つ揃えて婚約破棄とする 照児
 吹雪にも慣れて夫の帰りを待つ 行人
 雪寒むさむと発電所が動かない 舟遊
 雪国に美しき少女生れけり 夢虹
 灯を消せばひそかに雪の積む気配 千尋
 雪降るにまかせ検死の車待つ 新子
 お名残とは別に宣伝めくシキビ 呂人
 午前二時を歩く埃の立つ体 文秋
 埃っぽい人混みの中売る駄菓子 大丘子
 面会の子埃の顔で微笑する 九州男
 妻の癖なれば干支のせいでしょう 祐次
 苦しんだらもう見えず雪に死す 薄風
 無意識に起るしぐさをとがめられ 草人
 斬かく寝台宿を広く寝る 牧人
 人をさげすむ癖が淋しい皺になり 薫風子
 つくし掴む指先へ早春忍びきて 泰
 陽気さというて一枚シャツを脱ぎ 曙蝶
 就職が決り陽気な臆につき 湖州
 迂闊さを陽気の精にしてとほけ 生薑
 蒲公英を誇いでやわいものを踏み 梅志
 雪への郷愁雑踏の中にありて 悠紀
 この雪にまさかと父の好きき言う すゝむ
 山の灯に名残り惜しみ夜の汽車 三舟

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太報

福笹を持った男が事故にあい 凡太
 福の神夫婦げんかに腰をあげ 柳太
 えびっさん祭って倒産する会社 吞天
 十日戎も常の日頃は素通りし 摩天郎
 うわべだけ田満という倦怠期 きはち
 パバが好きママが好きと言わせ合い 栄一郎
 田満な家庭へかけたつづめの菓 雄声
 ふところ木枯吹いてね正月 美代
 末の娘が羽子板持ったまま眠り 日出男
 お正月壁も乾かぬ家に住み 静林庵
 三カ日高血圧を忘れてい 八郎
 わに口の女房もトソはオチヨボなり 吉太郎
 神鈴の休むひまなき初詣で 周一
 世話やきの伯母台所かきまわし 花梢
 世話やきかいてアパートの気が疲れ 尚史
 町会の世話も税金だけ苦手 白柳
 世話すぎが人のけんかも買って出る 松田
 世話すぎといわれ我が子ははつとる 紅月

宴会・出張パーティ・折詰弁当

大萬

梅里ノ店

料亭 阿倍野区松崎町三ノ一〇
 TEL(七三)三九三五番
 鮎の店 アベノ橋近映地下食通街
 TEL(七三)〇一四七番
 串の店 南区豊屋町三ツ寺センター
 TEL(三三)九一八四番



柳樽室

路郎 生

★よほど春めいてきたが、柳樽室のボクは相変わらずコタツにかじりついて原稿書きに没頭している。

★贊助の白川朋吉翁が老衰で亡くなられた。八十九才だといえは天寿だともいえようが、私にとっては大きなショックだった。白川さんに比べれば、まだ若い私ではあるが、「白川さんに死なれ近火のよにおもい」という句が生れた。白川さんのお宅から数丁離れたところに住んでいるので、よけいに、そんな気がしたのかも知れ

ぬ。天王寺本坊での告別式には腹乃に焼香してもらった。もう少し月日が経たねば霊前にぬかずけぬとは何んか弱い私ではある。しかし、こと川柳に関する限りは決して弱くはないからご安心が願いたい。★北陸・山陰地方に予測もしない豪雪があつて、お互いの心をくらくさせられた。あとかたづけが大変だろうと思う。出来るだけよい政治がおこなわれることを祈っている。

★しかし、世の中は悪いことばかりではない。前号で報じた蓬萊の火事で、多くの作品を失われた池田正三画伯が、五月頃にはアメリカから歐洲への旅をされるとの朗報に接したし、二月には東都の塚越迷亭氏の来訪をうけて歓談したし。三月三日にはホルルの築山快夢起氏が沖繩へ出かけ帰途には大阪へ立ち寄るとの知らせがあつたので楽しんで待っている。そ

れに三月の十七日には不朽洞会が総会をやるそうだから、しばらく顔を見ない人にも会えると思うと心がおどる思いがする。
★それから雑誌の方だが、二月号は発行日が少し遅れて愛読者の諸君にご迷惑をかけたにもかかわらず、新年号売切れ、引き続いて二月号売切れという状態である。これも寄稿家や愛読者諸氏のご支援ごべんたつの結果、内容がますますすよくなつたからに他ならぬものと思考し、一層の努力をしている。

★本号では「天馬」の河野春三氏に、「川柳現代」の「今井鴨平氏を語る」の執筆を願った。味読されたい。
★今後も、こうした人物紹介の好読物を提供したいと思う。対社会的に刊行を続けてはいるものの、

こうした専門誌は何んといつても内容の充実を図る以外に手はないとしみじみと思わされるからである。その意味から、本誌としては何処までも、内容充実を目指して一歩邁進を続けることを約束する。

こりと痛みに
サロンパス
久光兄弟株式会社
東京・佐賀・大阪

★三月句会——川雑支部
★王造十周年記念句会・11日(月)五時半、題、準備、花瓶・愛情、所、市電玉造南百米大阪信用金庫、★米子句会・10日(日)一時、題、反省・卒業・失敗、所、米子市公会堂和室、★南海電鉄句会・14日(木)六時、題、積み残し・無責任・指名、所、難波高架下親和クラブ、★阿倍野句会・20日(水)七時、題、うららか・活気・蛙・スタミナ、所、阿倍野区松崎町三ノ一〇割烹大万、★京都句会・16日(土)夕、題、嗚咽・艶聞・山氣、所、四条繩手仲源寺、★かがみ句会・3日(日)一時、題、一字・思いつき・設計・指紋・黒幕、所、池田古心居、★明和研究句会・17日(日)一時、題、親子・決算・欲ぼけ、所、阪神鳴尾駅東南二百米、鳴尾公民館和室。

★不朽洞会總會案内

路郎先生直門の門下生が一堂に会するの好機が来ました。常に川柳塔で、秀句佳吟をもって火花を散らしている面々が、先生直門の誇りを打ち出す不朽洞のバッジを胸に

かがやかせて、歴史的な總會を開催することになりました。それこそ万難を排してご自分の座席をお占め下さい。(詳細は往復ハガキでご案内申上げました)

★出席は不朽洞会員に限る

日時 昭和三十八年三月十七日(日)午後一時開催

場所 第一会場—自安寺 電話(211)二四七八
大阪市千日前電停東スグ北側

第二会場—喜楽別館

議題 本会規約改正の件。役員改選の件。

兼題 麻生路郎・腹乃両先生金婚祝賀記念事業協議の件、其他

会費 「人」路郎選「春」生々庵選「ニニス」多久志選
五百円

大阪市住吉区万代西5丁目25

川柳雑誌社内

川柳不朽洞会

2月1日 → 4月15日

Freshman **ペンロット フレッシュマン セール**



ご入学・ご卒業おめでとう

■期間中万年筆1本お買上げ毎に(500円につき1枚) 抽せん券進呈

▼2,000 **ペンロット・E**

何を選んでいただくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのにも心にくい贈物かと存じます

一〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です



は本橋条
な日四
大東京京都
高島屋

麻生路郎著 川柳の味い方・五百数十句

新川柳観賞

(毎日新聞評)

麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう五十五年にもなる。

この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の雑誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁寧な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうがっている。句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがっている。一気に読ませる魅力がある。

東野大八著 **風流人間横丁**

B6型 二五八頁
価 250円 送料70円

★異常な戦争にまき込まれ隻手となって帰還した著者のザックパランな人生批判が、その雄筆からほとばしるさまは凄い。まるで胸の牙えた坂場の切れ味にも似ている。★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

橘高薫風子著 麻生路郎序 **川柳集 有情**

定価250円 送料60円

▼著者は新進作家で、繊細な新感覚の持ち主である。川柳不朽詞会に入って採まれ、川柳編集部員として精進を続けている前途ある好作家である。約七年間の習作「有情」(うじょう)を上梓して広く世に問うことにした。

★ご送金は振替口座をご利用が便利で安全です(切手代用可)

発行所 大阪市住吉局区内 万代西5丁目25 **川柳雑誌社** 振替口座大阪75050 電話 大阪 柳 6081

Printed in Japan

発行所 **川柳雑誌社**

〒550 大阪市住吉区万代西5丁目25番地
電話 大阪 柳 6081
振替口座大阪 75050

発行所 **川柳雑誌社**

〒550 大阪市住吉区万代西5丁目25番地
電話 大阪 柳 6081
振替口座大阪 75050

日刊5号 毎月一回一日発行

川柳雑誌 第三十八号

定価 九〇円 (送料六円)

(禁転載)

半年 五七六円
一年 一〇八四円

昭和三十八年二月廿五日 発行
昭和三十八年三月一日 発行

代表取締役 麻生路郎
編集長 麻生幸二
印刷所 麻生路郎印刷所

募 集

課題吟募集

口下手 (手紙) 清水白柳選
善意 (手紙) 後藤梅志選
腕組み (手紙) 小浜牧人選
赤字 (手紙) 若本多久志選
口先 (手紙) 水松東岸選
内職 (手紙) 石倉旅風選

近作柳樽 (俳句) 麻生路郎選
川柳塔 (俳句) 北川春東選
文 章 (評論・研究・感想其他) 麻生路郎選

投稿規定

▼ 投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名推挙を明記する事。
▼ 「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。
▼ 「課題吟」は誰でも投句が出来る。
▼ 「川柳塔」の投句は不朽詞会員に限る。

毎月十五日締切

昭和廿二年七月二日 第三種郵便物認可
昭和廿八年三月一日発行(毎月一回一日発行)

編集者 藤生幸一郎 発行所 川柳雑誌社

麻生路郎先生著

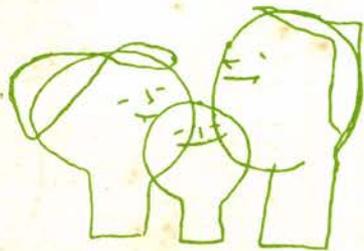
川柳雑誌社

大阪住吉区西五丁目二番地 電話大阪671天〇八一

郵政口座大阪七五〇五〇番

定価九十円(送料六円)

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL (641) 551-2

いつもホカホカ

ホットママ



■5~6人のご家庭向き
EC-21型 600W 2炊き 正価 4,600円
(計量コップ・吊手金具・ふきんつき)

SANYO

サンヨー 保温式 電気釜

・お求めはサンヨーストア・デパートで... 三洋電機株式会社

麻生路郎先生著

川柳とは何か

川柳の作り方と味わい方

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろもろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると常に常に革新的である。その川柳がいかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

価 二五〇円
送費 七〇円

取次所 川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区払方町27 振替東京29507



新和歌遊園

ロープウェイ

新和歌浦を一望におさめた空中散歩 高津子山へのスカイラインは四国淡路の連山も手にとるようです

料金 往復大人70円 小人36円
食堂 売店 駐車場 散歩道他
和歌山市駅下車電車又はバス
回転展望台大人30円 小人15円

南海雷車